

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 5

2016
December

12月

変化を恐れない

特集

10年後、20年後の社会を見据えた

これからの 進路指導のあり方

授業を進化！ 思考を深化！

実践 アクティブ・ラーニング

物理

富山県立富山中部高校／岡本直樹

指導変革の軌跡

北海道 釧路東高校

神奈川県立 川和高校

次代の教育を形づくる教委の一手

東京都

みんなで力を合わせて、
最高のパフォーマンスを見せる！

① 運動会の華「ショータイム」と「デコ」。「デコ」は木材や段ボール、新聞などで作り上げる巨大なオブジェで、材料を工夫して本物そっくりに見せたり、動くようにしたりと、各ブロックで工夫を凝らす。



② 「ショータイム」は、ストーリー性あり、圧巻のダンスありと目が離せない。選曲、振りつけ、衣装すべてを生徒が考え、3週間の練習で息の合ったパフォーマンスを見せる。見せ場は最後に全員で踊るシーンだ。



③ ④ 競技の配点は高く、優勝のためには負けられない。大小の玉を取り合う「もぎ玉」や、2人3脚に始まり最後は6人7脚になる「らせん」などは、チームワークを要するため、出場メンバーをよく考えて決め、練習も念入りを行う。

ハートを
こがせ！

Vol.11

静岡県立浜松北高校
運動会

すべての情熱をかけて
生徒全員でつくり上げる、
汗と涙の結晶の運動会

組織的な運営が
みんなが楽しめる
運動会へと
盛り上げる

負けられない戦いが、そこにある。
悔いが残らないよう全力を尽くす

静岡県立浜松北高校の運動会は、同校最大の行事だ。1～3年生の各1クラスで1つのブロックを組み、1～3年生で計10ブロックの対抗戦となる。特徴は、リレーや綱引きなどの競技のほかに、60～80人で10分間のパフォーマンスをする「ショータイム（ST）」と、横7・2×高さ4・5メートルの巨

大なオブジェ「デコ」だ。各ブロックとも工夫を凝らし、独創性や完成度を競う。夏休み明けの練習開始から本番までの約3週間、生徒たちは、毎日放課後の夜遅くまで、準備と練習に明け暮れる。特に3年生は、本格的な受験勉強態勢に入る前の最後の行事として、優勝を目指して全力を注ぐ。

⑤ 運動会運営委員は1・2年生の約100人の有志が務める。グラウンドのライン引き、競技への誘導、審判など、進行を滞らせることなくてきばきと進める。⑥ 競技や応援に夢中になると、水を取るのも忘れてしまう。熱中症対策のため、各ブロックの救護チームは決められた時間に水を配って回る。

⑧ 片づけ終了後、ブロックごとに集まり、3年生のリーダーが仲間に感謝の言葉を述べ、1・2年生に運動会への熱い思いを託す。



⑦ すべての競技が終わり、表彰式後には、全校生徒が輪になって、校歌と生徒の歌を大合唱。

2 特集

10年後、20年後の社会を見据えた

これからの進路指導のあり方

- 4 **現状把握** 10年後、20年後、生徒たちはどのような社会を生きるのか
- 6 **社会人が語る** 社会の「今」と「これから」、私たちの生き方・働き方
常識から自由になるために仲間と語り、考え続ける
株式会社カネカ 食品事業部 販売促進第二グループ 販促企画チーム 中原実香
会社という器を生かし、超えながら社会とかわる
ソニー株式会社 harmo事業室 サービスプランナー 西川翔陽
- 10 **教師が語る** これからの社会を見据え、
求められる進路指導と教師が果たすべき役割を考える
北海道旭川東高校 松井恵一 / 島根県・私立開星中学校・高校 浜屋 陽 /
山口県立下関南高校 松村成通
- 16 **実践事例1** 自己の成長をデザインできる力を育むため、社会に開かれた学校に
北海道旭川東高校
- 20 **実践事例2** 社会を変えられるという手応えが進路意識を豊かに醸成する
島根県・私立開星中学校・高校
- 24 **実践事例3** NIEや多様な言語活動を通して自身の将来や学ぶ意味を考究する
山口県立下関南高校

28 「探究学習」開発・推進 追跡レポート

教育活動の意義、目的を自由に語り合い、自校の生徒にふさわしいゴールを描く

30 ハートをこがせ！

静岡県立浜松北高校 運動会 目指すは優勝！ 学年を超えて、120人が一致団結

32 授業を進化！ 思考を深化！ 実践 アクティブ・ラーニング

「スマホ」と「ぼそぼそ」で学びの集団性を維持しながら、個々の学びを最大限尊重する
物理◎富山県立富山中高校 岡本直樹

36 指導変革の軌跡

北海道釧路東高校

基礎学力向上◎独自教材とテスト結果を活用した学び直して、学力の底上げを図る

神奈川県立川和高校

学校改革◎教師個々の実践が徐々に浸透し、変革が進む学校に

44 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

3年生0学期 学習計画・記録表

48 大学Evolution 大学が拓く新しい学び

グローバル化と地方創生を一体的に捉えた教育で、地域の課題解決を図る人材を育む
福井大学◎国際地域学部

52 次代の教育を形づくる教委の一手

東京都 外国人との対話の機会を増やし、生徒の自律的な英語学習と国際感覚の涵養につなげる

56 VIEW'S REPORT

2017年4月、滋賀大学に新設予定！

日本初のデータサイエンス学部が高校生対象のプレオープンイベントを開催

68 Reader's VIEW

〈ビュー21〉
高校版
Volume 5

2016
December

12月

今月の表紙メッセージ

変化を恐れない

◎社会が大きく変わろうとしています。それに伴い、これまでの考え方や方法が通用しない部分が生じることが考えられます。その時必要なのは、変化に自らを変えられるのではなく、新しい考え方や価値を自ら生み出す、すなわち、自らが変わることではないでしょうか。それはおそらく、自身の生き方や進路を選択する場面においても必要だと思われます。そして、変化を恐れないその姿勢は今、誰に最も求められているのでしょうか。そんな観点も含めて、今号の特集をお読みいただけたら幸いです。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます *本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

10年後、20年後の社会を見据えた

これからの

進路指導のあり方

少子高齢化、グローバル化、機械化・自動化など、社会の大きな変化を受け、教育改革や入試改革を始めとする教育環境の変化も加速している。

今後ますます激しく変化するであろう社会を生きていく現在の生徒たちは、どのように自身の進路を考え、選択していけばよいのだろうか。その時、必要とされるのはどのような力なのか。

そして、教師はその力を生徒にどう育み、彼らを導いていけばよいのか。

今号は、10年後、20年後の社会を見据えた、これからの進路指導のあり方について考えていく。

Q. 今後の進路指導上、課題として認識していることを教えてください。

◎就きたい職業やなりたい自分を決めて、それを目指すという進路指導から、「未来が分からないからこそ、学力や人間力を高めよう」という指導への転換を意識している。社会の変化が激しいため、今、目指している職業に就ける人はわずかであり、だからこそ、今、学業や部活動などに真剣に取り組み、校内外で様々な体験をし、汎用的な力を身につけることの大切さを伝えたい。(千葉県)

◎あと15年もすれば、今ある職業の約半数が人工知能やロボットがすなわけに置き換わる時代が来ると予測されているが、その時に人間でなければできない職業を目指すのか、人工知能やロボットに対抗すればよいのか分からない。「生きる力」をどう解釈すればよいのか、現場の教師が答えに窮しているのが現状だ。(静岡県)

◎生徒の視野が狭く、社会とのかかわりの視点で進路を考える力が、年々低下していると感じる。その結果、文理選択や科目選択で責任を伴った判断ができず、ミスマッチを来すケースが見られる。それを指導する教師が、将来就きたい職業から進路を考えさせるという指導から抜け切れていないのも、それに拍車をかけている。(静岡県)

◎「なぜ、勉強するのか?」と「勉強ができる幸せ」を深く理解することが重要だと思う。理解されているようで理解されていない根本的事項と思われる。(香川県)

◎生徒の多様な進路希望、保護者の安全・安定志向など、進路指導を取り巻く環境は大きく変化しており、18歳時の進学指導ではなく、30代、40代を見据えた進学指導が難しくなってきている。(鹿児島県)

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2016年8月にウェブとファクスで実施）

本号のテーマ

これからの進路指導のあり方を考える

現在の生徒が生きる、今後10～20年間に
予測される社会の変化の一例

現状把握【P.4～5】

- ◎2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろう。
ニューヨーク市立大学大学院センター教授キャシー・デビッドソン氏
- ◎10～20年後に、日本の労働人口の約49%が、技術的には人工知能やロボットなどにより代替できるようになる可能性が高い。
株式会社野村総合研究所「国内601種の職業ごとのコンピューター技術による代替確率の試算」
- ◎日本の人口は、2030年に65歳以上の割合が総人口の3割に達する一方、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）は総人口の約58%にまで減少。
国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2012年1月推計）」

変化の激しい社会を生きる中で、よりよい進路選択をできるように
するためには、どのような力を、どのようにして育めばよいのか？

求められる力と進路指導のあり方

社会人が
語る

【P.6～9】



「それまでの常識や価値観にとらわれず、『本当にそうなのか、
そうでなければならないのか』と、自分や周囲に問いかけ、考え続ける」
株式会社カネカ 中原実香



「社会の変化によって、生き方・働き方を変えられるのではなく、
変化を利用して、自ら生き方・働き方を変える」
ソニー株式会社 西川翔陽

教師が
語る

【P.10～15】



「社会の変化が激しいこれからの時代は、ずっと学び続けることが求められる。
『なぜ、学ぶのか』という問いに、本質的な答えを返せる生徒を育てる」
北海道旭川東高校 松井恵一



「生徒が学びの意味を見出すためには、他者貢献や社会貢献の視点を
生徒に与えることも大切。その意識が、学び続ける上でのエンジンになる」
島根県・私立開星中学校・高校 浜屋 陽



「授業を通じて、『なぜ、学ぶのか』『どう生きるのか』を
生徒に深く考えさせるとともに、教師が生徒とじっくりと向き合う時間を確保する」
山口県立下関南高校 松村成通

各校の
具体的な
取り組み

実践事例1

北海道旭川東高校 【P.16～19】

自己の成長をデザインできる力を育むため、社会に開かれた学校に

実践事例2

島根県・私立開星中学校・高校 【P.20～23】

社会を変えられるという手応えが進路意識を豊かに醸成する

実践事例3

山口県立下関南高校 【P.24～27】

NIEや多様な言語活動を通して自身の将来や学ぶ意味を考究する

現状把握

職業のあり方が大きく変わる ことが予測される未来

現在の高校生の多くは、高校卒業後、大学や短大、専門学校などに進学するであろうが、いずれ社会に出て、職業に就き、働くことになる。これまでも時代の変化に伴い、消える職業、新たに生まれる職業はあったが、人工知能（AI）の発達やIoT（*）の実現などの技術革新の影響などにより、今後10～20年間で職業のあり方が大きく変化することが予測されている（図1）。中でも、野村総合研究所が発表した、国内601種類の職業について、それぞれ人工知能やロボットなどで代替される確率を試算した結果は、大きな衝

図1 今後の職業のあり方に関する予測

2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろう。

—— ニューヨーク市立大学大学院センター教授キャシー・デビッドソン氏

今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い。

—— オックスフォード大学准教授マイケル・オズボーン氏

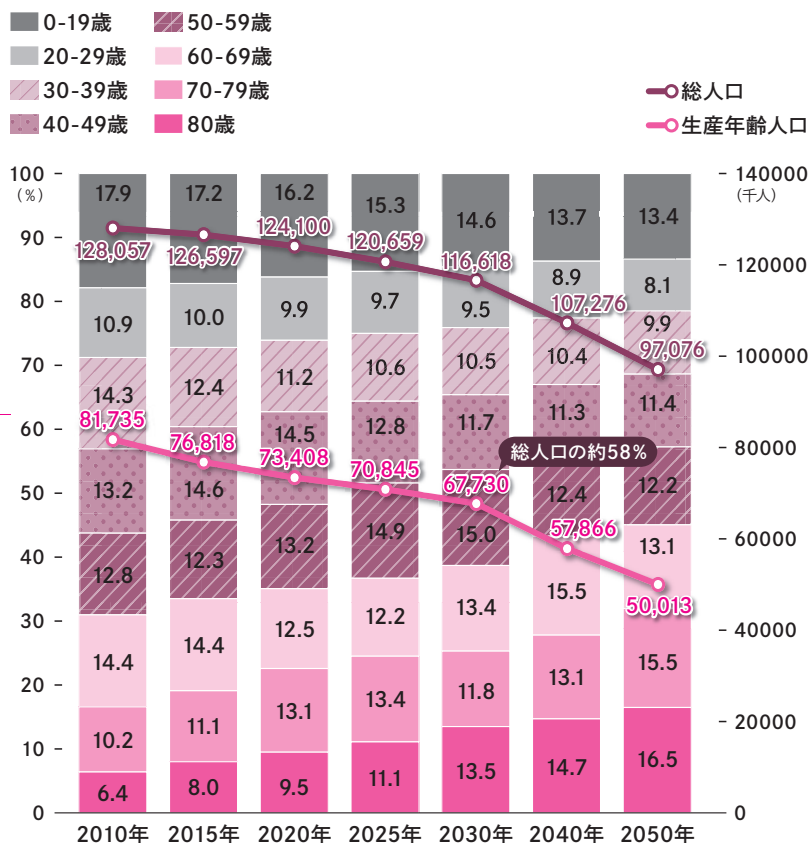
2045年には人工知能が人類を越える『シンギュラリティ』に到達する。

—— アメリカ人発明家レイ・カーツワイル氏

10年後、20年後、生徒たちはどのような社会を生きるのか

これからの進路指導を考える上で、社会の「これから」を見通すことは欠かせない。現在の生徒が担い手の中心となる10年後、20年後の社会は、どのように変化しているのだろうか。

図3 日本の将来推計人口／年代別構成比（出生中位〈死亡中位〉推計）



出典／国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2012年1月推計）」

* Internet of Thingsの略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。

撃を与えた。それによると、10～20年後に、日本の労働人口の約49%が、技術的には人工知能やロボットなどにより代替できるようになる可能性が高いと推計されている。図2を見て、「AIの進化などによって、人間の職業が奪われるのではないか」といった不安を覚えた人もいるだろう。

一方、日本の人口は、2030年に65歳以上の割合が総人口の3割に達し、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）は総人口の約58%にまで減少すると予測されている（図3）。また、50年までに、現在の居住地域のうち約2割が「無居住化」とするといった予測もある（図4）。

ここで示した予測し得る環境変化だけでも、それが現実のものとなれば、社会に大きなインパクトをもたらすだろう。当然、予想だになかった変化も起こり得る。そうした変化の激しい社会を生きる今の生徒たちは、この先、多くの進路選択の場面に直面するかもしれない。その時、よりよい選択をできるようにするためには、どのような力を育めばよいのだろうか。

図2 人工知能やロボットなどによる代替可能性が高い職業、低い職業

◎人工知能やロボットなどによる代替可能性が高い100種の職業

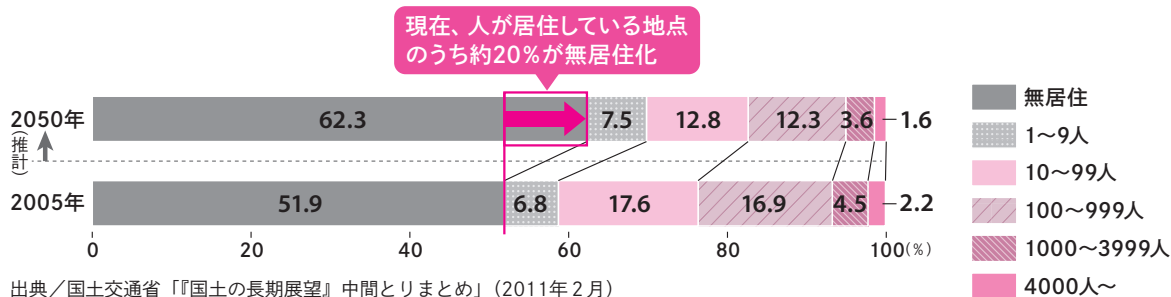
IC生産オペレーター 一般事務員 鋳造工 医療事務員 受付係 AV・通信機器組立・修理工 駅務員 NC旋削盤工 NC旋盤工 会計監査係員 加工紙製造工 貸付係事務員 学校事務員 カメラ組立工 機械木工 寄宿舎・寮・マンション管理人 CADオペレーター 給食調理人 教育・研修事務員 行政事務員（国）	行政事務員（県市町村） 銀行窓口係 金属加工・金属製品検査工 金属研磨工 金属材料製造検査工 金属熱処理工 金属プレス工 クリーニング取次店員 計器組立工 警備員 経理事務員 検収・検品係員 検計員 建設作業員 ゴム製品成形工（タイヤ成形を除く） こん包工 サッシ工 産業廃棄物収集運搬作業員 紙器製造工 自動車組立工	自動車塗装工 出荷・発送係員 じんかい収集作業員 人事係事務員 新聞配達員 診療情報管理士 水産わり製品製造工 スーパー店員 生産現場事務員 製パン工 製粉工 製本作業員 清涼飲料ルートセールス員 石油精製オペレーター セメント生産オペレーター 繊維製品検査工 倉庫作業員 惣菜製造工 測量士 宝くじ販売人	タクシー運転者 宅配便配達員 鍛造工 駐車場管理人 通関士 通信販売受付事務員 積卸作業員 データ入力係 電気通信技術者 電算写植オペレーター 電子計算機保守員（IT保守員） 電子部品製造工 電車運転士 道路パトロール隊員 日用品修理ショップ店員 バイク便配達員 発電員 非破壊検査員 ビル施設管理技術者 ビル清掃員	物品購買事務員 プラスチック製品成形工 プロセス製版オペレーター ボイラーオペレーター 貿易事務員 包装作業員 保管・管理係員 保険事務員 ホテル客室係 マシニングセンター・オペレーター ミシン縫製工 めっき工 めん類製造工 郵便外務員 郵便事務員 有料道路料金収受員 レンジ係 列車清掃員 レンタカー営業所員 路線バス運転者
--	--	--	---	--

◎人工知能やロボットなどによる代替可能性が低い100種の職業

アートディレクター アウトドアインストラクター アナウンサー アロマセラピスト 犬訓練士 医療ソーシャルワーカー インテリアコーディネーター インテリアデザイナー 映画カメラマン 映画監督 エコノミスト 音楽教室講師 学芸員 学校カウンセラー 観光バスガイド 教育カウンセラー クラシック演奏家 グラフィックデザイナー ケアマネージャー 経営コンサルタント	芸能マネージャー ゲームクリエイター 外科医 言語聴覚士 工業デザイナー 広告ディレクター 国際協力専門家 コピーライター 作業療法士 作詞家 作曲家 雑誌編集者 産業カウンセラー 産婦人科医 歯科医師 児童厚生員 シンリオライター 社会学研究者 社会教育主事 社会福祉施設介護職員	社会福祉施設指導員 獣医師 柔道整復師 ジュエリーデザイナー 小学校教員 商業カメラマン 小児科医 商品開発部員 助産師 心理学研究者 人類学者 スタイリスト スポーツインストラクター スポーツライター 声楽家 精神科医 ソムリエ 大学・短期大学教員 中学校教員 中小企業診断士	ツアーコンダクター ディスクジョッキー ディスプレイデザイナー デスク テレビカメラマン テレビタレント 図書編集者 内科医 日本語教師 ネイル・アーティスト バーテンダー 俳優 はり師・きゅう師 美容師 評論家 ファッションデザイナー フードコーディネーター 舞台演出家 舞台美術家 フラワーデザイナー	フリーライター プロデューサー ベンション経営者 保育士 放送記者 放送ディレクター 報道カメラマン 法務教官 マーケティング・リサーチ マンガ家 ミュージシャン メイクアップアーティスト 盲・ろう・養護学校教員 幼稚園教員 理学療法士 料理研究家 旅行会社カウンター係 レコードプロデューサー レストラン支配人 録音エンジニア
---	--	--	---	---

*五十音順、並びは代替可能性確率とは無関係 *職業名は、労働政策研究・研修機構「職務構造に関する研究」に対応
出典／株式会社野村総合研究所「国内601種の職業ごとのコンピューター技術による代替確率の試算」NRIとオックスフォード大学オズボーン准教授、フレイ博士の共同研究。本試算はあくまでもコンピューターによる技術的な代替可能性の試算であり、社会環境要因の影響は考慮していない。

図4 人口規模別メッシュ数（2005年→2050年）



社会の「今」と「これから」、 私たちの生き方・働き方

ICTの発展や少子高齢化、グローバル化などにより社会が大きく変わる中、生徒たちはこれからどのような生き方・働き方を選択していくことになるのだろうか。次代を創る2人の若手社会人の話から、自らの進路を切り開くために必要な力を考える。



株式会社カネカ
食品事業部 販売促進第二グループ
販促企画チーム

中原実香さん

常識から自由になるために
仲間と語り、考え続ける

これまでの常識にとらわれず
新しい価値を追求する

現在、油脂やイーストなどの加工食品用原料を扱う事業部に所属しています。これまで、営業や商品企画、マーケティングなどを担当してきました。高校時代に家業を手伝ったことが経営学への興味につながり、大学では企業への商品開発提案にも取り組みました。そして、就職先を考

える中で、人の暮らしを技術で豊かにする会社に関心を持つようになり、株式会社カネカに入社しました。

入社して10年が経ちますが、海外拠点が増えるなど、仕事の面でもグローバル化を感じます。しかし、より大きな変化だと感じるのは、競争が激しく変化の多い社会の中での、新しい価値を創出する必要性です。私の事業部ではマーガリンやイーストを扱うのですが、お客様に新しい

価値を提供するためには、時には現在のマーガリンやイーストの枠を超えた発想の製品提案が必要になってくると思います。自分たちの常識にとらわれずに、より広い視野を持つて考える必要性が高まっています。

実際、上司はよく「長期の目標と短期の目標をしっかりと区別した上で、それらを融合させながら仕事をしなさい」と言います。競争も変化も激しいグローバル社会で会社が存在し続けるためには、主力製品を守り続けることだけに注力するのではなく、時には本業から逸脱することもある恐れずに、自由な発想でビジネスを考えることが大切だと思います。

これまでの常識にとらわれないためには、市場の動向をつぶさに見る

ことはもちろん、社内の様々な部署の人たちと対話を重ねることが重要です。まして、人々の嗜好が多様化している今、営業部門、技術部門、マーケティング部門などがそれぞれの知見を持ち寄り、新しい価値をつくるために協力していくことがますます重要になっていくと感じます。

20代半ばの頃、営業を担当していた、取引先とのトラブルが続いたことがありました。結果的には、迷惑をかけた取引先ともそれまで以上のよりよいパートナーシップを築くことができましたが、それは技術部門など他部署の社員も総出となって、先方の想定を上回るくらい真摯に、反省の気持ちと具体的な改善策を伝えることができたからだと思っています。



なかはら・みか◎神戸大学経営学部卒業。2006年、株式会社カネカ入社。マーケティングや営業などを担当。12年に出産・育児休業を取得。復帰後、現在のチームに所属。

ます。「相手のことを理解したい」「一緒に考えたい」という思いに社内のメンバーが応えてくれ、そしてその様子を見た取引先の方たちにも理解を示してもらえたのです。

お客様にはお客様の、他部署には他部署の考えがあります。いつも私と意見や思いが一致するとは限りません。それでも、相手を理解したいという気持ちを持って接することで、相手も私のことを理解してくれるようになり、一緒によりよい改善策を見つめようという動きにつながっていきます。お互いを尊重し、対話を重ねる中でこそ、自分たちの常識を

超えられる瞬間が生まれます。そして、それが会社を、そして社会をもよりよくしていく一歩になるのだと思います。また、「私はこの会社で、こんな風に社会に貢献している」という自信にもつながるはずです。

社会人、家庭人として 疑問を投げかけ続ける

仕事と育児の両立が始まり、3年目になります。元々、子どもが生まれても仕事は続けるつもりでしたが、実際は想像以上に大変なことがかりました。子育てや家事の時間が格段に増えたため、仕事に充てられる時

間や同僚とのコミュニケーションの機会は一気に減り、社会人としてこれまで積み上げてきた自分のあり方が一変したことに戸惑いました。

社会人であり、家庭人でもある新しい自分を模索する中で気づいたのは、自分が狭い価値観の中の「母親像」にしばられていたということでした。仕事と子育ての両立のためには、時には何かを捨てたり、後回しにしたりすることも必要なのに、私にはそれができていませんでした。また、家族や同僚に頼ることを「甘えだ」と思う自分もいました。今は、家事に対しては「ここまでやればよい」と割り切る代わりに、毎日この時間は子どもとの時間にすると決めるなど、優先順位をつけられるようになりましたが、価値観を変えるのは簡単ではありませんでした。仕事や家事に追われ、このままでは倒れてしまうかも……とぎりぎりまで追い詰められて、やっとそれまでの自分の価値観を崩し、発想の転換をすることができました。

女性の社会進出は、日本ではまだ

道半ばです。身近なロールモデルも多くはありません。だからこそ、私たちは「社会人」「母親」の古いモデルにとらわれないよう、周囲の人と話し合いながら、あるべき姿を考えることが必要ではないでしょうか。今も、同僚の女性社員に家庭と仕事の両立について話を聞き、私らしいあり方を考え続けています。

ビジネスも、家庭と仕事の両立も、正解は1つではありません。だからこそ「本当にそうなのか、そうでなければならぬのか」と、自分や周囲に問いかけ、ともに考え続けられる人でありたいと思っています。

私が考える

これからの高校生に求められること

高校時代に自分の枠を超えたり、常識を見直したりする経験をすると思います。私の場合は、短期留学が自分の常識を問い直す初めての経験になりました。自分の枠を超えることで、自分とは何かを考えることができますし、自分を形づくっている軸、コアの部分に気づくことができるのではないのでしょうか。



ソニー株式会社
harmo事業室 サービスプランナー
西川翔陽さん

会社という器を生かし、 超えながら社会とかかわる

常に社会への貢献を考え、 「机の下」でも動き続ける

私が所属するharmo（ハルモ）事業室は、クラウドシステムを活用した電子お薬手帳サービスを医療機関や薬局に提供しています。このサービスのきっかけは、私の上司が自らの闘病経験の中で「薬の処方歴を医療従事者により正確に、よりスムーズに伝えられるようにしたい」と考えたことでした。上司は最初、会社の了承を得る前に机の下で自ら企画・開発を進め、最終的には会社の事業としてサービス化されました。

「会社の了承を得る前に机の下では、ソニーではそれほど珍しいことではありません。2014年のFIFAワールドカップでは、日本代表と対戦したコートジボワールの無電化地域約10か所に、ソーラーパネル

やプロジェクターなどを持ち込み、パブリックビューイングを設置しました。これは、民族間の対立が続く同国で、サッカーを通して人々をつなげたいというJICA（国際協力機構）職員からの呼びかけに、様々な部署から集まった有志社員約100人が応えたものです。終業後、自主的なミーティングを数か月間重ね、各々の部署の上司を通して機材や渡航費の提供を会社につけ合いました。

こうした活動は、長い目で見れば新しい市場でのソニーの価値を高めることになり、何より目先の利益にとらわれず、社会貢献という価値を見いだしたからこそ、多くの社員が集まったのだと思います。

会社の潜在能力を 社員一人ひとりが引き出す

社会問題の解決にかかわりたいと

いう思いを強く持ったのは、大学生の時です。高校時代の友人がうつ病になったことから、自殺問題の解決に関心を持ち、自殺を思いとどまった人たちの事例を記録し、予防に役立ててもらうウェブサイトの設立に携わりました。当時は、画期的な取り組みだとマスコミにも取り上げられました。一方、年間3万人を超えていた自殺者数を減らすためには、別のアプローチも必要ではないかと考えるようになりました。

また、南米を旅行した時、貧しい集落で、子どもたちがブラウン管のテレビの前に集まり、番組を楽しんでいる様子を見ました。そこで私は、技術には人々の生活に喜びを与える力があることを実感したのです。そして、技術を適切に活用し、普及させることで、少子高齢化や環境問題などの社会問題を解決したいと考え、私は今の会社を選びました。

入社して実感したことは、この会社にはさらなる質的な成長余力があるということです。私が、南米やコートジボワールで感じた価値と、この会社がマジORITYティイとして提供している価値とのギャップを感じるこ

ともあります。また、社員一人ひとりの目の前にはやらなければいけない仕事があり、1日の大半の時間はそれで過ぎていくかもしれません。しかし、優秀なエンジニアが数多くいるこの会社が社会に対してできることはまだまだあると確信しています。言い換えれば、この会社には、社会に対して貢献できる大きな潜在力を秘めているのです。

会社が社会にさらなる価値を提供し続けていくためには、会社に所属する私たち一人ひとりが、社会をよりよくしていくために、積極的にかわろうという気持ちを持ち続けることも必要だと考えています。「机の下」をいとわぬ情熱は、これからはますます求められると思います。また、一人ひとりが業務の中で自分のプロフェッショナルティイを高め続けることも大切です。言われたことをきちんとこなすだけでなく、業務の意味を自分の頭で考え、先輩の姿からも学ぶ。それでも、自分の知識や力が足りていないと感じたら、社外でも学ぶ。私も、経営企画部門に所属した際、先輩たちの議論についていくために、社外で会計学を学

社会の変化を生かして 生き方を主体的に変える

びました。

最近、企業の中には、土・日・祝日や終業後に、収入を伴った他の仕事に就業する「兼業」「副業」を認めるところが出てきています。社会環境の変化によって市場が縮小したり、事業構造の改革が求められたりする中で、社員のやりがいや成長、社会貢献による達成感を重視して、兼業や副業を認めるのもこれからの企業の1つのあり方だと思います。これは私の個人的取り組みですが、



にしかわ・しょうよう◎早稲田大学商学部卒業。
2011年、ソニー株式会社入社。HQ経営企画部門を経て、現在の部署に所属。2016年より、東京大学生産技術研究所協力研究員。

今年から、東京大学の生産技術研究所に通い、食料生産技術特別研究会の社会実装に参加しています。日本の農業は、後継者不足が問題になっていますが、儲かる作物を儲かる方法で育て、儲かる販路をつくるのができれば、若い人たちにとっても農業はもっと魅力的な仕事になるはず。食料生産技術特別研究会は、工学と農学を融合して、高速育種や画像による作物管理など、革新的な食料生産技術を開発することを目指しています。私は、大学の研究と、農村地域の人たちが抱える課題を接続するコーディネーターとして研究

会に参加し、主に週末に活動しています。この兼業についても、会社の役員たちは社会的に価値のあることだと捉え、「やるからには本気でやれよ。腰かけ気分では社会を変えられないぞ」と快く、しかしプロフェッショナルとして厳しい態度で許可してくれました。

会社における個人のあり方や一人ひとりの仕事のあり方は、これまでと大きく変わってきています。例えば将来、頭の中で考えた文章が自動的に入力される技術が開発されれば、キーボードを叩く業務は私たちの仕事の中からなくなります。自分の仕事は将来どんな風が変わっていくのだろうか、不安になることもあるかもしれません。しかし、キーボードに向き合っていた時間を、考えたり、話し合ったりする時間に費やすことで、それまで以上にスピーディーに、しかもより自分の個性を発揮しながら、仕事の中に新しい価値を生み出すことができるようになると思います。

私は、社会の変化によって生き方、

働き方を変えられているというように、変化を利用して自ら生き方、働き方を変えている感覚です。

変化を利用することで、自分の個性を生かして様々なことに挑戦できる可能性が広がっています。会社や国を越えて、時には机の下でこっそりと、社会問題にアプローチするプロジェクトに携わっているのもその挑戦の1つです。変化の激しい時代だからこそ、会社という器は、一人ひとりが人生を楽しむため、そして自分たちの未来をよりよいものにするために集う場所として価値を高めていくのだと思います。

私が考える

これからの高校生に求められること

社会に出る前に必要なのは、絶対的な感動体験だと思います。限界まで突き詰めて何かを成し遂げたり、1人ではできないことをチームで達成したりした経験が、他者にも感動を与えられる人を育てるのではないのでしょうか。楽しいと思ったことに愚直に取り組み、やり切ること。私にとって、それは部活動でした。

これからの社会を見据え、 求められる進路指導と 教師が果たすべき役割を考える

昨今の教育環境の変化の背景には、社会のあり方が大きく変わってきていることがある。「答えが1つではない問題に直面する社会」では、どのような力が必要で、高校にはどのような進路指導が求められるのか。自校の生徒の志望を育て、よりよい進路指導を模索する3校の教師が語り合った。

道を提示する指導から 考え方を提示する指導へ

柏木 ニューヨーク市立大学の
キャシー・デビッドソン教授は、
「2011年にアメリカの小学校に
入学した子どもたちの65%は、大学
卒業後、今は存在していない職業に
就くだろう」と予測し、日本の教育
現場でも大きな話題となりました。
人工知能の発達やグローバル化の進
行などによって、今の高校生が30代
や40代になった時には、社会は大き
な変貌を遂げていることが考えられ
ます。そのような社会環境の変化を

考えた時、高校では、これからの
ような進路指導が求められると思わ
れますか。

松井 従来の「道を提示する進路指
導」から「考え方を提示する進路指
導」への転換が必要だと思います。
これまでの進路指導は、生徒に将来
就きたい職業を決めさせて、「その
職業に就くのなら、大学はこの学部
のこの学科に進んだ方がいいよ」と、
ゴールまでの最短距離を逆算する指
導をしてきました。しかし、今後は
社会環境の変化によって、なくなる
職業がある一方で、新しく生まれる
職業もあるはずです。そう考えると、

今の段階で道を提示して、将来の生
き方を限定することは、生徒の可能
性を狭めてしまうことになりかねま
せん。むしろ、「君が興味を持って
いることを、社会の中で実現しよう
とするならば、こんな働き方が考え
られるし、今後社会がこう変わって
いけば、こんな働き方も考えられる
かもしれないね」といったように、
働き方や自分にとっての働くことの
意味・価値を考えさせることが重要
です。

は、自分は将来何をしたいのかを考
えさせますが、具体的な職業にまで
は必ずしも落とし込ませない。その
ような進路指導では、生徒は将来の
進路が決まらず不安に感じるかもし
れません。そこで生徒には、「これ
からの社会は何が起きるか分からな
いからこそ、可能性がたくさんあつ
てわくわくするよね。どのような社
会になったとしても、充実した人生
が送れるように、自分は社会に出た
ら何をしたいか、どんな貢献ができ
そうかを考えよう」といったメッ
セージを発信していくことが大切に
なると思います。

生徒たちの構えた態度を 時間をかけて解きほぐす

浜屋

私は現在は教頭を務めていますが、昨年までは一教師として学級担任をしていました。私が担任として進路指導の際に注力していたのは、面談を通じて、生徒に将来の生き方や働き方をより深く考えさせること、覚悟を決めさせることでした。例えば以前、経営学部に進みたいという生徒がいました。しかし、最初の面談では、「経営学部を出て、どんな仕事をしたいの？」と私が尋



北海道旭川東高校

松井恵一

まつい・けいち

教職歴18年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。担当科目は政治・経済。

ねても、全く答えられませんでした。

その後、3年生になってようやく、「将来は会社を経営してみたい」と言うようになりました。ただ、経営者として具体的に何がしたいのかまでは、定まっていなかった様子でした。

そこで私は、「もし自分が経営者になって、お金を自由に使えるとしたら、その時、君は何がしたい？」と誘導してみました。すると、彼から出てきた言葉は、「起業を通じて、地元貢献できる人材を育てたい」というものでした。それからは、彼自身も自分のやりたいことが明確に



島根県・私立開星中学校・高校

浜屋 陽

はまや・あきら

教職歴28年。同校に赴任して29年目。教頭。

なったようです。今は大学に進学し、

人材育成に関するいろいろなボランティア活動や講演会などにも参加して研究活動を行っているそうです。

この生徒のように、「地元貢献できる人材を育てる」といった、自分がやるべきこと、やりたいことに対しての覚悟が決まれば、今後社会がどのように変化したとしても、その生き方を貫けるはずです。

生徒は、「自分が本当にやりたいこと」を簡単には見つけられません。1・2年生のうちから何度も問い続け、大学入試の直前になってようやく、



山口県立下関南高校

松村成通

まつむら・しげみち

教職歴27年。同校に赴任して11年目。進路指導部長。担当科目は地理。

く、自分の進むべき方向が固まっ

くる生徒もいます。それでも私は、生徒には結論を出すのを急がせず、とことん考えさせるようにしていました。そういった進路指導は手間がかかりますが、これからはますます必要になってくると思っています。

松村 私も面談が果たす役割は非常に大きいと考えています。ただ難しいのが、自分の進路について教師と

考えがずれることを恐れてか、駄目出しをされないようにすごく構えて面談に臨んでくる生徒が多いことです。それでも、志望している大学や学部・学科が、自分なりに深く考えた上で決めたものであればまだよいのですが、生徒自身の希望というよりも、保護者の意向をくんだものである場合が少なくありません。

ですから私は、生徒の、将来の進路は「こうすべきだ」「こうするし



(株)ベネッセコーポレーション

柏木 崇

『VIEW21』高校版 編集長

かしわぎ・たかし

かない」と決めつけてしまっている状態を解きほぐすことから始めるようにしています。そして、生徒が授業での活動や部活動、委員会活動などの特別活動を通して、自分の適性や、本心からやりたいと思えることを探り出し、深掘りできるように、時に寄り添い、時に揺さぶりをかけながら、仕かけていきます。

それには時間がかかります。保護者や教師から指示されることに慣れていて、自分で考える習慣がついていない生徒も少なくありません。私は面談の時に、進路や学習のことについて、必ず生徒の方から2つ以上質問をさせるようにしています。しかし、自分自身に関することにもかかわらず、驚くほど質問が出てきません。それは、自分で考え、動くことができなくなっているからだと思います。そしてその要因は、私たち教師が彼らの考える機会を奪っているからではないか、といった自己反省もあります。

浜屋 確かに、私たち教師が口を出しすぎていることは考えられますね。例えば集会の場面では、私たちは時間を気にするあまり、すぐに「2



「社会の変化が激しい
これからの時代は、ずっと
学び続けることが求められる」
松井

年生は早くここに座りなさい」といった指示を出してしまいます。しかし、最近は時間がオーバーしそうになっても、あえて何も言わないようにしています。すると、生徒は自分で考えて行動するようになるんですよ。

そのように、あえて生徒自身に考えさせ、行動させる機会を教師が意図的に増やしていくことが必要なのかもしれません。

学びの意味を見いだし 学び続ける力を育む

松井 これからは進路に対する考え方が変わるだけでなく、学ぶ意味や理由も変わってくるのではないかと思います。今までは、進学や就職といった次のステージを確定させるために学ぶという側面がありました。そのため、進路に直結しないこと、例えば、入試で課されない教科・科



「他者に貢献したいという意識が
大学や社会に進んでも
学び続ける力を生む」
浜屋

目は、「その科目を勉強しても意味がない」と言って、学ぼうとしない生徒が少なからずいました。また、進学先や就職先が決まるまでは一生懸命勉強しますが、進路が決まった後は学びから離れてしまうケースも多く見られました。ある意味、それが許された社会だったわけです。しかし、社会の変化が激しくなっていくこれからの時代は、次のステージに進んだからといって安泰というわけではありませんから、ずっと学び続けることが求められます。「なぜ、学ぶのか」という問いに、本質的な答えを返せる生徒を育てる必要があると思います。

柏木 学びの意味を見いだすためには、何が大切になるのでしょうか。
松井 本校では、「旭東アカデメイア」という名称の探究学習を実施しています。その取り組みに携わる先生方と話しているのは、「生徒には大いなる不完全燃焼をさせたい」ということです。

昨年の生徒の中に、探究するテーマを自分で決めて、一生懸命研究活動をしていた生徒がいました。ところが、いざまとめの段階に入った時に、その研究は既にほかにもまとめた人がいることが明らかになったのです。それにより、その研究は生徒にとっては不完全燃焼なものになってしまったわけです。そこでその生徒は、その分野でまだ明らかになっていない部分を自分の手でもっと探究したいと考えるようになりました。今はその研究を大学で続けるために、大学受験の準備をしています。



『授業を通じて』『なぜ、学ぶのか』
生徒に深く考えさせる」 松村

不完全燃焼が、次のステージで学び続けるための原動力になっているのです。

だから私は、探究学習では生徒は結果を出せなくてもよいと考えています。結果を出すことが探究学習の成果ではなく、次のステージでの学びにつなげていくことが成果であると捉えています。

松村 生徒たちに今取り組んでいることだけで満足させずに、その先の学びを見せるというのは、普段の授業の中でも意識するべきことだと思います。私の担当科目は地理ですが、教える内容は教科書に沿いながらも、授業の中で取り上げる話題や教材を工夫することによって、「地理という科目は、奥が深そうだな。もっと学びたいな」と生徒たちに感じさせることは、十分可能だと考えています。

ます。学校の活動の中心は何と言っても授業ですから、授業を通じて次のステージでの学びを見せることが大事です。そのため教師には、教材研究や授業研究が欠かせません。

他者貢献や社会貢献の視点を生徒に与える

浜屋 私は、生徒が学びの意味を見いだすためには、他者貢献や社会貢献の視点を生徒に与えることも、大切なのではないかと考えています。

例えば、私たちが今こうして、これからの高校の進路指導のあり方を議論したり、考えたりするのも、やはり根底にあるのは、「生徒がこれから時代をよりよく生きられるようにしたい」「社会の役に立ちたい」といった他者貢献や社会貢献の意識です。その意識が、私たち自身が学

び続ける上でのエンジンになっています。ですから生徒に対しても、他者貢献や社会貢献の意識を育みたい。そのためにはまず、他者や社会に対する関心そのものを高める必要があります。

松村 その通りですね。今は家庭で新聞を読んでいる生徒が増えていきます。そのためか、生徒は社会の動きをよく知りません。そこで本校では、様々な教育活動でNIE（＊）を取り入れており、記事の中で気になった部分に線を引いてノートに貼らせ、一言コメントを書かせるといった活動を続けています。また、地理の授業では、生徒に新書を読ませ、その内容を文章で要約させたり、口頭で説明させたりするといったことも行っています。新聞を読むことで、社会で起きている問題を幅広く知り、新書を読むことで1つの問題を深掘りして考えさせるということを意識しています。

「どう生きるのか」を生徒に深く考えさせる機会を設けることだと思えます。先人たちが生き方や社会のあり方をどう考え、学問に取り組んでいたかを学ぶことが、自らの生き方や学び方を考える上で役に立つはずです。

浜屋 本校でも、道徳は非常に重視しており、今年度からは「総合的な学習の時間」の中に、道徳をテーマとした学習を取り入れました。

本校は1学年6クラスですので、6人の副担任の教師が持ち回りで1時間ずつ違うクラスに出向きます。そして、学級担任とTTで授業を進めています。生徒は計6人の教師から毎回違うテーマを提示され、どう生きるべきか、一緒に考え、議論していくのです。

松井 私は、外部の力を活用することも大切だと思います。教師だけでなく生徒を指導し、評価していると、生徒も教師の評価に自分を合わせようとするため、こちんまりとまとまってしまう。地域の大人など、教師とは異なる視点を持つ人だからこ

* NIE(Newspaper in Education = 「エヌ・アイ・イー」)は、学校などで新聞を教材として活用する学習のこと。

そ、生徒の能力や資質を引き出し、視野を広げることには貢献してくれる場合もあると思います。教師だけで、生徒を育てようとしないうちも大事ですね。

生徒の学びや成長の状況をどう把握し、評価するか

浜屋 従来とは進路指導のあり方や育むべき力が変わってきている中で、生徒の学びや成長についての評価方法も、従来とは異なる方法を開発していく必要があると思います。しかし、「生徒の進路観がどこまで醸成されたか」「学び続ける力がどの程度身についたか」といったことを客観的に把握、評価するのは難しい。それが課題だと思います。

松井 その課題の解決に必要な第一歩は、学校ごとに「育みたい生徒像」を明確にすることでしょう。そして、その「育みたい生徒像」に、個々の生徒がどこまで近づいているのかを評価するための指標をつくることです。適切な評価を行っていく上で必要なことだと思います。

浜屋 確かにそうですね。本校では、「つくる力(創造力)」「つなげる力(共

生力)」「もちこたえる力(忍耐力)」の3つの頭文字を取った「つつも」を、学校として育むべき学力として捉え、教育活動を展開しています。

本校もその3つの観点で、生徒の成長を把握、評価する方法をつくっていかなくてはいけないと思います。

松村 そういった意味では、かつて「総合的な学習の時間」の導入にあたって、SI(スクール・アイデンティティ)の確立の重要性が盛んに言われましたが、各校がもう一度SIを見直すべき時期が来ているのかもしれない。

また、近年の大学は、アドミッション・ポリシーをかなり具体的に打ち出すようになりました。そのため、高校側も「その大学がどんな学生を求めている、どういった教育を行うおうとしているのか」を把握した上で、進路指導ができるようになりました。高校も大学と同じように、アドミッション・ポリシーや、さらには卒業までに身につけさせるべき能力を定めたディプロマ・ポリシーをより明確にできれば、アドミッション・ポリシーやディプロマ・ポリシーに照らし合わせて、生徒が入学から

現在まで、どこまで成長しているかを評価できるようになります。それはこれから検討していくべき点ですね。

大人の側こそ変わる必要がある

柏木 先ほど松村先生は、「希望進路は保護者の意向をくんで決めるもの」と思い込んでいる生徒が少なくない。その固定観念をどうほぐしていくかが重要だ」といった話をされていました。保護者世代の進路観や職業観に生徒が縛られているといった面はあるのでしょうか。

松井 それは私も感じます。私が教師を務めている北海道は、保護者の資格志向や公務員志向が強いです。

私が保護者の方に「これからの社会はますます激しく変化していくと思われまう」と話すと、「不確実性が高い時代だからこそ、子どもには安定した職業に就かせたい」と多くの保護者は言います。するとどうしても生徒は、保護者のそういった考え方の影響を受けてしまいます。

松村 そのような生徒ほど、学力的にも伸び悩む傾向があります。学び

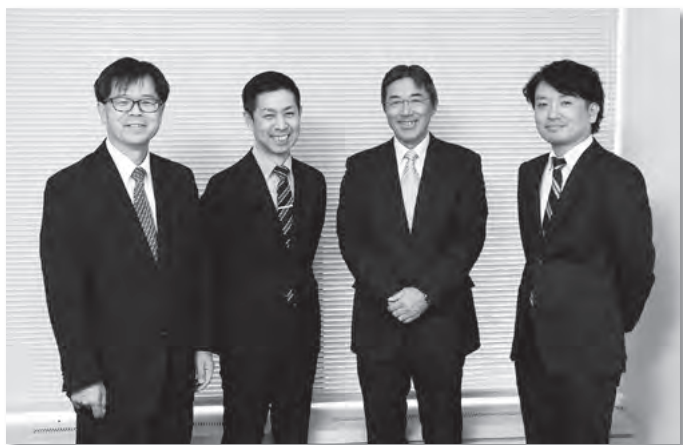
が、次の段階に進むためのものになっっているため、高校での成績も頭打ちになりやすく、その生徒の可能性を狭めている気がします。

私は生徒に、「もし、ここに将来のことが何でも分かる魔法の水晶玉があるとしたら、君は10年後の自分の姿が知りたい?」と尋ねることがあるのですが、生徒たちは口をそろえて「見たくないです」と言います。未来のことは分からないからこそ楽しみなのであり、それぞれが自分の可能性を信じているのです。ところが職業に関しては、保護者の影響を受けて早く決めたがります。

浜屋 生徒たちが探究的な活動に取り組んでいる様子を保護者に見せる機会を増やすことは、保護者の意識を変えるための有効策になるかもしれません。本校はSSHの指定校ですが、発表会での生徒たちの姿を見て、「家では全然話してくれないのですが、うちの子は学校でこんなことに興味を持って研究をしていたんですね」と、感激した面持ちで話される保護者の方がいらっしやいます。そういったことがきっかけで、子どもの将来の進路や職業に対する

保護者の価値観が変わることもあります。

保護者を学校に巻き込んでいくのが難しいのは事実です。本校では親学講座を年に3回程度開催していますが、なかなか出席率が上がりません。来ていただけるのは、教育事情や社会動向に元々興味をお持ちの方で、本当に来ていただきたい方になかなか来ていただけない。ただ、子



どもの成長に興味がない保護者はいないはず。学校としては、社会や教育の状況、子どもの学びの姿を保護者に知っていただく機会を増やす工夫をこれからもしていかなければいけないと思います。

松井 そう考えると、変わらなくてはいけないのは、子どもではなく、むしろ大人の方かもしれません。子どもは時代の申し子ですから、次の時代にも対応する力を潜在的に持っているものだと思います。ところが、大人が変化を恐れているために、自分たちの時代の価値観や考え方を子どもたちに押しつけ、彼らの可能性を阻害している恐れがあります。それは保護者だけでなく、私たち教師にもあてはまります。教師にも、変わることに対する抵抗感が少なからずありますからね。

柏木 では、ここまで話してきた「これからの進路指導のあり方」を教師間で共有し、個々の教師が変化を恐れず、果敢に挑戦していける教師集団をつくっていくためには、どのようなことが必要になると思われますか。

か。

松村 ここまでの私たちの議論に対して、読者の先生方の中には、「そんなことを言っても、多忙でそこまです手が回らない」といった感想を抱かれた方も多いと思います。しかし、生徒に「どう生きたいのか」「なぜ、学ぶのか」を深く考えさせる指導を行うためには、生徒とじっくり向き合う時間を確保することが不可欠です。そのためには、今抱えている業務や行事をチェックし、効果が低いものは思い切って削ることが必要だと思います。本校でも、1つ新しい進路関係行事を導入したら、必ず1つ減らすようにしています。

浜屋 以前、本校のある委員会で、学校が抱えている問題について教師間で話し合ったところ、出てきたのは教師間のコミュニケーションに関することばかりでした。それはどこかの高校も同様に抱えている課題ではないでしょうか。結局のところ、教師間のコミュニケーション不足が、進路指導や生徒指導、学力観の共有の妨げになっているように思います。

す。例えば職員室で席が離れていても、相手の席まで足を運び、顔を突き合わせて関係をつくっていく必要があります。

松井 私は1人の教師が何でもできるようになる必要はないと思います。例えば、苦手な分野はほかの先生や外部の人の協力を仰ぎ、自分は得意分野を磨いていく。そうした協働的な学校組織をつくっていくけば、一人ひとりの教師に時間的な余裕ができ、生徒への進路指導においても、変化を恐れずに挑戦する気持ちになるのではないのでしょうか。

また、私たちは教師という仕事を通じて、大人が働く姿を生徒に見せている面もあります。教師同士で協力しながら1つの仕事をやり遂げる姿を目にすることで、「働くってこういうことなんだな」と、生徒たちは学んでいきます。そういった意味では、教師が生き生きと働いている姿を生徒に見せることは、これまでも、そしてこれからも、大切な進路指導であると思います。

自己の成長をデザインできる力を 育むため、社会に開かれた学校に

北海道旭川東高校では、生徒が目前の大学合格だけにとらわれずに、自身の未来を築いていく力を身につけるためには、生徒がもっと社会と接し、自分と社会とのつながりを考えることが必要だと捉えている。その認識の下、生徒と社会をつなぐ様々な取り組みを進めている。その中で、生徒たちは、教師が驚くような発想を発表することもあり、能力を引き出す支援の重要性を、教師は改めて感じている。

社会とのかかわりが、生徒に 様々な気づきと学びを生む

北海道旭川東高校は、例年約180人が国公立大学に合格する、地域を代表する進学校だ。進路指導のあり方に「自己の成長をデザインする力の育成」を掲げ、「イメージの自己像」[〓]と「現実の自己像」[〓]を広げていき、[〓]想[〓]実[〓]がより大きく一致することを目指した指導を行っている(図1)。進路指導部長の松井恵一先生は、その思いを次のように語る。

「以前、『就職活動がうまくいかない』と、難関大学に進学した複数の

卒業生から言われ、あれだけ指導しても生徒の未来は築けていなかったのかと愕然^{がくぜん}としました。大学合格や就職内定はゴールではなく、生徒はその後の未来も自分でつくっていくしなければなりません。ならば、私たちは、生徒に自分で成長し続けられる力を育まなければならないと、強く思うようになりました」

教務部長の尾村晃治先生には、生徒の学ぶ意識を変えさせなければならぬと痛感した出来事があった。

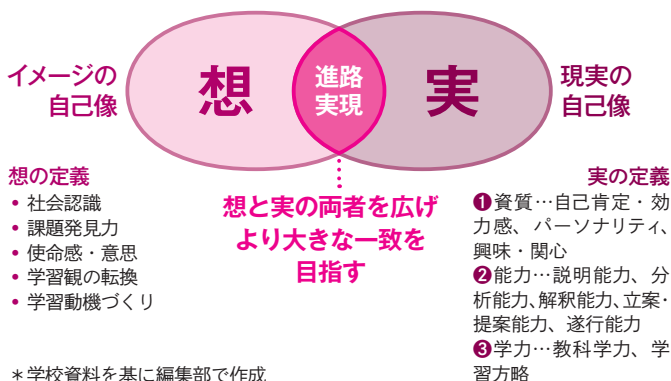
「英単語のテストで、プリントの位置で英単語を覚えてきた生徒がいて、テストではその位置が変わっていた

ために解けなかったということがあります。その生徒に『なぜ、勉強するのか、勉強にどんな意味があると思うか』と尋ねると、『テストのために勉強している』と答えました。それに驚き、生徒が学びの意味や目的を感じられないような指導をもっとしなければならぬと思いました」

そのような教師の思いが重なり、進路指導は現行の形となっていた。さらに、松井先生は昨年、地域で開かれたワークシヨップに参加し、地域の学校への期待を改めて考えたという。

「地域が本校に求めているのは、難関大学や医学部への入学者をより多く

図1 「想実一致の進路デザイン」



出すことだと思っていました。ところが、地域の人たちと話すと、それだけでなく、旭川を出ても将来は戻ってきてほしい、未来の旭川を考え、地域を支えていってほしいといった願いもあることに気づかされました。しかし、生徒は地域のことをほとんど



松井 恵一 まつい・けいいち
北海道旭川東高校
教職歴18年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。「生徒の可能性を信じ、それを引き出すことに努めたい」



尾村 晃治 おむら・こうじ
北海道旭川東高校
教職歴17年。同校に赴任して11年目。教務部長。「生徒を信じることで可能性を伸ばすことになる」



千葉雄次 ちば・ゆうじ
北海道旭川東高校
教職歴22年。同校に赴任して11年目。進路指導部長。「個々の生徒が持つ力を最大限に発揮させたい」



仲俣 薫 なかまた・かおり
北海道旭川東高校
教職歴20年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。「夢に向かって前向きに挑戦する生徒を支援していきたい」



花尻健明 はなじり・たけあき
北海道旭川東高校
教職歴9年。同校に赴任して2年目。進路指導部長。「常に前向きに、あたり前のことをあたり前にする」

ど知りません。生徒と社会をつなぐ場をもっと設けようと思うとともに、それによって、生徒が様々な年代の大人と接することは、自身の生き方を考える場になると考えました」

大学、社会で花開くよう 問題解決型の思考を習慣づける

そうした考えの下、15年度から生徒が社会との接点を持つ新たな取り組みを、授業と課外活動で着手した。授業での取り組みの1つは、1・2年次の「総合的な学習の時間」で行う「アドミッション・ポリシー研究」

北海道旭川東高校

- ◎創立113年の道内有数の進学校。学校標語は「シマレガンバレ」「挙校大和」。2009年度から北海道「地域医療を支える人づくりプロジェクト」の医進類型指定校。3年次に文型・理型・医進類型に分かれる。
- ◎設立 1903（明治36）年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国立大は、旭川医科大学、北海道大、北海道公立大、東京大、京都大などに192人が合格。私立大は、北海道医療大、北海道薬科大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ299人が合格。
- ◎URL <http://www.ah.hokkaido-c.ed.jp>

だ。大学が求める人物像や大学が担っている社会的責任などを、アドミッション・ポリシーを基に生徒個々で調べた後、グループでの意見交換で考えを深め、最後に自身の目標をもう一度見つめ直す。1年次では、北海道大学、東京大学、京都大学のアドミッション・ポリシーを大学名を伏せて提示し、2年次では、自身の志望大学のうち2校のアドミッション・ポリシーを課題とした。

進路指導部の千葉雄次先生は、取り組みのねらいを次のように語る。

「大学は何のために存在していて、自分はなぜ大学に行くのかを考えてほしい」と思っていました。アドミッション・ポリシーを通して大学の社会的責務や社会のニーズを知ること、自分と社会とのかわりにも気づかせるというねらいもあります」

実際、今年度の2年生の活動後には、生徒から「どの大学のアドミッション・ポリシーにも『グローバル』と書いてある。それが、大学や社会で求められる最低条件なのだと分かった」という声が上がったという。

16年度には、新聞記事を活用した、生徒の視野を広げるための取り組みである2年次の「小論情報」の方法を一新した。昨年度までは新聞記事を毎日配布するのみだったが、今年度は、その中から週1回1枚選んでワークシート（写真1）に取り組み、現代文の教師に提出する。教師は検印と適宜コメントを添えて返却し、生徒は各自でファイルにとじる。そして、3か月に1回、現代文の授業でファイルを回し読みし、生徒同士でコメントを書く。ワークシートは、記事の要約、問題点と解決案などを小論文

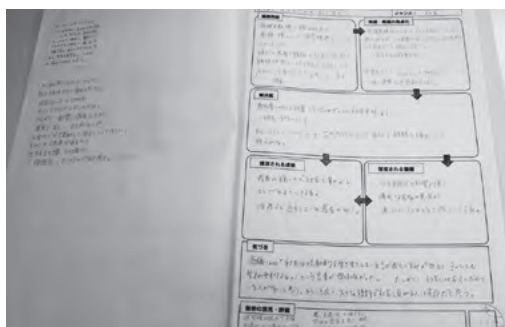


写真1 ワークシートには、「概要把握」「問題・課題の焦点化」「解決案」「想定される成果」「想定される課題」「気づき」の枠を設け、問題解決の枠組みを学べるようにした。「他者の意見・評価」には書き込みが溢れ、裏面に書く生徒もいる。

の構想メモのように、段階を追って考えられる形にした。

そのような方法にしたねらいは、多様な分野の新聞記事を読み、また、他者から自分の考えに対する意見をもらい、社会への視野を広げること。そして、時事問題について考え、構想メモを作るという小論文学習の土台を築くこと。さらに、問題解決型の流れで考え、自分の意見を提示するという習慣を身につけることだ。

「1つの解決案で問題がすべて解決するものではなく、また別の問題が出てくるはずであり、それも想定して解決案を考えなければなりません。そうした考え方はすぐに身につくものではなく、学習転移には時間がかかります。ほかの取り組みもそうですが、大学での研究や就職後の仕事でその考え方が必要となった時に、活動の成果が表れると思って、取り組ませています」（千葉先生）

方法を改めて半年。記事の内容に関心があつて選んだものの、「記事に関連する知識が少なくて解決案まで書けない」といった生徒の気づきを生んでいる。また、新聞社が異なる、同じニュースでも捉え方が違う

ことに気づき、「ものの見方が変わった」「家族とニュースについて話す時に、自分も意見を言えるようになった」といった声も上がっている。

最近では、生徒からワークシートの枠組みをなくしてほしいという要望が出た。活動の担当者で、新聞記事を毎日選定している進路指導部の仲俣薫先生は、こう手応えを語る。

「最初は用紙の枠組みに沿っていけば考えやすかったけれども、慣れてくると、『別の流れで考えたい』『ほかの分野と結びつけて考えたい』という欲求が出てきたようです。『他者の意見・評価』の欄も小さく、プリントの裏にまで書く生徒もいます。ワークシートの形式を見直して、生徒が選べるよう数種類用意する予定です」

問題解決と価値創造の 両面で探究活動に取り組む

課外活動では、15年度、「旭東アカデミア」という新たなチャレンジを始めた。10〜3月の週1回、放課後に1・2年生の希望者が参加する活動だ。課題や問題を発見し、解決策を探る「問題解決」と、これまでになかった新しい価値を提案してい

く「価値創造」をテーマに、前半は様々な思考訓練とミニ・プレゼンテーションを行い、後半は生徒が個人またはチームでテーマを設定して探究活動をし、研究発表する。初年度は25人が取り組み、16年度は20人が参加している。本活動を企画・運営する千葉先生は、活動への思いをこう語る。

「社会では『問題解決能力』が重要だと言われますが、新たな価値を創造する側面があつてこそ、問題解決に結びつくのではないのでしょうか。例えば、ソニーが『ウォークマン』を開発したことで『屋外で個人が音楽を楽しむ』という新たな面白さを生み出しました。生徒にそうした発想力を身につけてほしいと思い、『問題解決』と『価値創造』の両面で探究活動に取り組む場を設けました」

千葉先生が教材を作成し、ファシリテーターも務める。心がけているのは、生徒の内面を揺さぶり、発想を引き出すことだ。今年の第1回では、千葉先生が「自己紹介の定義をみんなで決めて、それに基づいて自己紹介をしよう」と提案。生徒は一瞬驚いたが、すぐに話し合いを始めて、定義を決めていった。1学年担

任で進路指導部の花尻健明先生は、生徒の気質に応じた活動だと話す。

「今の生徒は、周りの生徒との話し合いに積極的に取り組みます。アカデミアの参加者を見ると、人から新しいことを吸収したい、人とながつていたいという生徒が意外と多いと感じます。生徒の気質を学びに生かすことも大切だと思いました」

松井先生は、活動の手応えを次のように語る。

「昨年、『忘れ物をしないためにはどうすればよいか』を話し合っていた時、ある生徒が『かばんがついてくるようにすればよい』と発言しました。私は最初、意味が理解できなかったのですが、例えて言えば、タブレット端末の登場前に、ここまで手軽に情報を持ち運べるようになることを多くの人が想像できなかったのと同じです。生徒には驚くような力があり、それを発揮できるよう支援することは、とても重要だと感じました」

身近なロールモデルに 触れる機会を増やす

今年7月に始めた「学びのフローラ」は、大学生や社会人による講演

会で、既に6回実施した。同校の卒業生でもある花尻先生は、講演者の人選について次のように説明する。

「生徒が将来を考えられるロールモデルとなるよう、この人の生き方にぜひ触れてほしいと感じた卒業生や地域の人に、直接依頼しています。初回は、9年間勤めた会社を辞めて医学部医学科に入学した、私の同級生でした。また、地元の起業家や作業療法士として働きながら論文を書いて大学教員となった卒業生など、様々な人たちに依頼しています」

今後も、生徒の力を引き出し、く、多様な活動を行う考えだ。

「例えば、放課後に希望者が集まり、『小論情報』を基に小論文を書いて意見交換をする場を設けたいと考えています。任意の活動は、部活動などで参加が難しい生徒もいます。時間の設定や声かけなどを工夫したいと思います」(仲俣先生)

**次代の教育を見据えて
活動を先取りし、深化させる**
「自己の成長をデザインする力の育

成」に向けて、校内での意識統一も図る。13年度には、教師用『進路シラバス』を作成し、進路指導のあり方と3年間の指導の流れ、各活動のねらいと指導のポイントなどを示した(図2)。それまで暗黙知として継承されていたが、松井先生が校外研修に参加し、「10年後の自校を考える」「3年間の指導ストーリーをつくる」といったワークショップを体験したことをきっかけに、自校の進路指導

図2 『進路シラバス』取り組みと育成すべき能力の対応表

		社会科学	課題発見	意思・使命感	力感	自己肯定・効	パナリティ	興味・関心	説明能力	分析能力	解釈能力	立案・提案能力	遂行能力	学習方略	教科学力
学習群	授業	◎	○	○	○			○	◎	◎	◎			◎	◎
	講習・学習会								◎	◎	◎			◎	◎
	各種模試		○		○				○	○	○			○	◎
行事群	合唱コンクール		○	◎	◎	◎	○		◎		◎	◎	◎		
	学校祭	○	◎		◎	◎	◎	◎	○	○	○	◎	◎		

自校の教育活動とそこで育成すべき能力を一覧表にし、共有した。

* 学校資料を基に編集部で作成

を整理して全校に示すことにした。

「意味のない活動があれば止める機会にもなると考えましたが、進路行事や補習など、どれも目的や時期にきちんとした意味があることが分かりました。模試の回数が多すぎると思っていました。改めて見ると、生徒の意識を高めたり、学力の把握に必要だったりと、各時期に実施する意味を再認識できました」(松井先生)

以降、『進路シラバス』は毎年見直し、教師全員に配布している。生徒向けには、『進路シラバス』に手を加えて『旭川東高校で自ら進路をデザインするために』という冊子を配布。大学合格を目的とした内容ではなく、「自分と他者を幸せにするための進路のデザイン」を考えさせる内容とした。また、定期的に進路だよりを発行するとともに、すべての学年集会で、進路に関して必ず進路指導部の教師が情報を発信。全生徒、全教師に同じメッセージが伝わるようにしている。

今後の課題は、次期学習指導要領や高大接続改革を見据え、進み始めた取り組みの指導経験を積み重ねて、

改善を図ることだ。

「『小論情報』や『旭東アカデミア』などは始めたばかりで、目立った成果はありませんが、次の時代の教育に必ず求められる活動だと考えています。世の中の潮流に押されてから始めても、指導経験がないまま行えば、生徒に『やらせる活動』になっってしまうでしょう。意識は一遍には変わりません。大学合格だけに向いている意識を、生徒も教師も変えていく、来るべき時に向けてしっかりと土台づくりをしていきたいと思っています」(松井先生)

もう1つの鍵はカリキュラム・マネジメントだと、尾村先生は語る。

「現在は補習などがあり、生徒が自分のためを考えて使える放課後の時間はそう多くありません。カリキュラム・マネジメントの観点で教育課程を編成することが求められていますが、自己の成長をデザインする力をつけさせるためには、生徒が自己管理できる時間を確保するカリキュラムを検討しなければならないと考えています」

社会を変えられるという手応えが 進路意識を豊かに醸成する

開星中学校・高校では、2013年度に校内で学力観の統一を図り、10年来の歴史を持つキャリア教育「開星ドリカム・プラン」に加え、SSHの指定を受けた中高一貫コースで「SMILEプログラム」を導入した。教科の学びを実践で生かすことで、社会を変えられる力を生徒に自覚させ、真の希望進路に迫ることを目指している。

生徒自身が成長を実感できる キャリア教育に深化させたい

開星中学校・高校では、1999年、「総合的な学習の時間」の全面実施を見据えて「開星ドリカム・プラン」（現「開星夢実現計画」と呼ばれるキャリア教育プログラムをスタートさせた。これは、将来を見据えて夢や目標を描き、それに基づいて志望大学・学部を定め、日々の学習や大学入試へのモチベーションを高めていくプログラムだ。名称は、キャリア教育の先進例であった福岡県立城南高校の「ドリカム・プラン」を参

考にした。

「開星ドリカム・プラン」はマイナーチェンジしながら継続してきたが、2011年度、SSHの申請を機に大幅な改訂に取り組んだ。浜屋陽教頭はその背景を次のように語る。

『「開星夢実現計画」では、1年次に職業を知るところから始めますが、3年次の最後の面接練習で志望動機を聞いてみると、その内容が浅い印象を受けることが少なくありませんでした。職業や大学などの進路に関する知識は増えたものの、高校生活を通して自分がどういう能力を身につけたのかといったところまで認識

できていないことに原因があったのだと思います。生徒が自分の成長を実感し、自分は社会でどのように活躍できるのかということを考え、それを語れる力を育てる必要があると思いました」

折しも「21世紀型能力」などの学力観を巡る議論が活発化していた時期とも重なり、浜屋教頭を座長とする「開星未来構想委員会」が立ち上げられ、育成すべき生徒像と学力観の統一が図られることとなった。同時に、「開星ドリカム・プラン」を再編して6年一貫の「SMILEプログラム」（中高一貫コースで実施）を

策定し、13年度から5年間の指定でSSHに採択された。以下、「開星夢実現計画」の中核的取り組みである「ドリカムの時間」と「SMILEプログラム」を中心に、進路意識を高める取り組みを見ていく。

身につけさせたい力を 「つつも」の3つに集約

同校の学力観は「つつも」に集約されている。それは、「つくる力（創造力）」「つながる力（共生力）」「もちこたえる力（忍耐力）」の頭文字を取ったキャッチフレーズで、わかさ和聡宏校長が常々生徒や教師に語り

かけてきた言葉だ。

「『つつも』に集約する前は、学力の捉え方が教師間でまちまちでした。ある先生は知識に比重を置き、別の先生は活用力に注目する。最終的にそれぞれの生徒が志望する大学の入試を突破できる力を育成しなければいけないという点では一致しても、そこで重視する力に違いがありました。教師が同じベクトルで前に進むために、全校で目指すべき学力



開星中学校・高校校長
大和聡宏 おおたわ・あきひろ
教職歴29年。同校に赴任して30年目。「生徒は未来からの留学生。未来で輝いてくれるために尽力する」



開星中学校・高校教頭
浜屋 陽 はまや・あきら
教職歴28年。同校に赴任して29年目。「より高めへ。失敗を恐れず、挑戦する姿勢を持つ」



開星中学校・高校
田中 薫 たなか・かおる
教職歴17年。同校に赴任して18年目。研究開発主事。SS日部長。「常に生徒とともに、常に生徒のために、常に公平に」



開星中学校・高校
石川 浩介 いしかわ・こうすけ
教職歴14年。同校に赴任して11年目。学習進路部長。高校2学年主任。「自ら考え行動できる生徒を育てる」

観を統一すべきだと考えました」（浜屋教頭）

生徒に身につけさせたい力とは何か、「開星未来構想委員会」のメンバーが話し合って約20の案を出し、それを半分にまとめ、最後に論理的思考力や分析力は「つくる力」に、表現力や協働性は「つなげる力」に、自律性や計画性は「もちこたえる力」に、といった具合に「つつも」に集約し、全教師が持つべき共通の学力観が固まった。

「研究授業の際、先生方は『つつも』のどの力を育てるのかを明確にした

島根県・私立開星中学校・高校

◎松江・シン裁縫女学院として創立。「品性の向上をはかり、社会の発展に役立つ有望な人材を育成する」を建学の精神とする。陸上・柔道・野球・体操・テニスなど全国レベルの部活動が多い。

◎設立 1924（大正13）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2016年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、島根大、岡山大、広島大、島根県立大などに7人が合格。私立大は同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、広島経済大、広島国際大、安田女子大などに延べ40人が合格。

◎URL <http://www.kaisei-matsue.shimane.jp/>

上で指導案を作成するようになりました。授業後の振り返りでも、以前は先生方が思い思いに感想を述べる程度でしたが、今は『つつも』を切り口として建設的な話し合いができています」と大多和校長は述べる。

進路観の醸成と思考力・表現力を養う「進路探究」

「開星夢実現計画」（図）の中心的な取り組みが、水曜日5時間目の「ドリカムの時間」（17年度から「進路

図 「開星夢実現計画」（特別進学コースの場合）

ステージⅠ 1年〈視野の確立〉	ステージⅡ 2年〈夢の探求〉	ステージⅢ 3年〈夢に向かって〉
三瓶研修 (自) 入学後の4月末に実施。新入生同士で交流を深め、集団生活により規律を学ぶ。クラスごとに校歌を歌う「合唱コンクール」が開催される。	小論文コンクール (自)(社) 受験勉強や自己表現、コミュニケーションの基礎となる小論文を全員で学ぶ。最後は、全員参加による、コンクールを実施。	ライフプランニング (自)(社)(進) 生命保険会社とのコラボレーション授業。一人ひとりの人生をプランニングし、自分の人生を考える。卒業後も役立つ実践的な授業。
アメリカ研修旅行 (自)(社) アメリカの姉妹校を訪れ、ホームステイをしながら異文化を体験する。 ※高校1・2年生合同での自由参加	模擬裁判 (社) 「裁判員制度」を、実際の事件を題材に学ぶ。最後は、模擬裁判を傍聴し、全員で判決を出す。	面接・小論文指導 (自)(進) 進学・就職に備え、一人ひとりの進路希望に合わせてきめ細かく指導。ここまでの開星高校での経験により、自己表現力が上がっていることを実感する。
語彙・読解力養成講座 (自)(社)(進) 社会への視野を広げ、社会を読み解くために語彙・読解力を養成する。検定を受験することも可能。	関東研修旅行 (自)(社)(進) 関東方面で2泊3日の研修を行う。自分で行きたいところを決め、進路について考える。	進路情報会 (自)(社)(進) 大学・短大・専門学校の教員を招き、自分の進路希望に合わせて、進学後や将来の話を聞く。 ※3年間実施

行事名の下にある表示の意味

(自): 自分を知る、自分を表現する (社): 社会に学ぶ、社会を学ぶ (進): 進路(夢)を考える

*学校資料を基に編集部で作成

探究」に名称変更予定)だ。職業ガイダンスや進路講話など、まとまった時間が必要な活動は、6時間目のLHRとつなげて2コマ連続で実施している。

1年次は職業調べを通して自分に適した進路を考え、2年次にその進路につながる学問分野や大学・学部・学科を絞り込む。特徴は、2年次に大学・学部・学科調べと並行して小論文講座やスピーチ、ディスカッション、語彙・読解力講座といった表現力育成の取り組みに重点を置いている点だ。学習進路部部長の石川浩介先生は、次のように語る。

「教科の学びや進路選択において何より重要なのは、生徒が自分で考え行動する力ですが、本校の場合、自ら考えるところにたどり着けていない生徒が少なくありませんでした。進路意識の醸成だけではなく、進路実現に必要な思考力や表現力の育成が必要だと考えました」

16年度には、思考力や表現力を高める取り組みとして、石川先生が顧問となり、「探究クラブ」という部活動を創部した。3年生は2年次の流れを引き継いで小論文やディス

カッションを実施する。1・2年生は興味あるテーマを選んでミニ課題研究を行い、興味・関心を広げたり社会貢献について考えたりする。16年度現在、3年生19人、1・2年生11人が加入しているが、特に1・2年生が3年生から受ける刺激が大きいという。

「3年生が大学入試に向けて小論文に取り組んでいる姿を間近に見たり、先輩と一緒に入試の小論文問題に取り組んだりする中で大きな刺激を受けています。今後は運動部などに所属している生徒にも兼部させ、小論文講座に参加させるなど、より多くの生徒が参加できるようにしたいと考えています」(石川先生)

学びと社会のつながりに気づく「SMILEプログラム」

16年度に4年目を迎えたSSHの「SMILEプログラム」は、サイエンス(科学)・モラリティ(道徳性)・インターナショナルリテリ(国際性)・リテラシー(読み書き能力)・エンタープライズ(先進性)の頭文字から名づけられた。プログラムの策定にあたって教師たちが念頭に置いた

のは、現状の教育に対する反省である。SSH部長の田中薫先生は言う。「授業で学習したことをテストで再現することはできても、本場に社会で役立つ力として身につけているのかという疑問を抱いていました。単に大学に合格するためだけの勉強ではなく、自分たちの力が社会に有用なものである、授業で学んでいることは意味があるということに気づかせ、生徒の変容を促したいと考えました」

取り組みの軸になるのが、学校設定科目の「科学探究」と「課題研究」だ。中学1年次〜高校1年次の「科学探究Ⅰ・Ⅱ」で、実験デザインやレポートの書き方、プレゼンテーションのスキル、クリティカルシンキングなどを身につける。その上で、高校2・3年次に理系選択者を対象に「課題研究」を実施し、自分が興味・関心のある、社会とのつながりを意識したテーマを追究する。

「理科以外の教科の知識も総動員して実験・研究を行うことで、自分たちが習得した知識が役に立つ、社会を変える力があるということに気づいてほしい。そうした自覚を持つ



写真「起業家スクール for サイエンス」の様子。商品開発、販売などの過程で「自己実現」「社会貢献」といった仕事の価値を学ぶ。

ことが社会の一員として必要な素養であり、卒業後も自ら学び続ける基盤になるのではないだろうか」と、田中先生は期待を寄せる。

中高一貫コースの中学3年次・高校1年次を対象とした「起業家スクール for サイエンス」(写真)も、社会とのつながりを意識した取り組みの1つだ。生徒が企業に商品を提案して共同開発を行い、文化祭などで販売するプログラムで、生徒自身が受け入れ企業を探してアポイントメントを取り、実際にプレゼンテーションをして出資を依頼する。電話口で断られることも珍しくな

く、社会の厳しさを知る機会にもなっている。

教科融合型授業の導入で、 知識を統合・活用する力を養う

学びの意義を体感させるために、教科融合型の授業にも着手した。「SMILEプログラム」では、中学1年生～高校1年生を対象に、国語と英語を融合させた学校設定科目「コミュニケーションメソッド」を実践している。少人数グループで日本語でのディベートや英語でのプレゼンテーションを行い、論理的思考力やコミュニケーションスキルの向上を目指す。

16年度からはドリカムコース（17年度から「キャリアデザインコース」に名称変更）3年次の選抜クラスでも、教科融合型の授業を取り入れ、1学期は理科と地歴・公民、2学期は国語と英語で実施した。理科と地歴・公民の融合授業では、地元の食材を使った新製品の開発を行った。グループで食材や商品を考え、生産・流通まで見据えた計画を立てて発表

する。味覚や栄養など食品の成分については理科分野、商品開発や流通は地歴・公民分野の知識が反映される。16年度の3年生は、出雲市斐川町^{ちまう}の出身生姜を使用したジンジャーエールの開発を提案した。17年度からは3年次のキャリアデザインコース全クラスで教科融合型の授業を取り入れる予定だ。

面談での問いかけが 進路への考察を深める

「ドリカムの時間」や「SMILEプログラム」で進路意識・社会貢献意識を醸成してきた生徒たちが、最後に自分と社会や大学との接点について深く考える機会になるのが、学習進路部主導で実施する「判定面接」だ。一般に大学への推薦の可否は、推薦基準に照らし、教師が会議で決めることが多いが、同校では「判定面接」と呼ばれる生徒との面談で推薦の可否を決定する。

推薦希望者1人に対して教師2人の面接を行い、志望理由や進学後の展望などをつぶさに聞く。どのよう

な地域貢献がしたいのか、なぜその学問を学びたいのかを繰り返し問いつける中で、生徒自身も漠然としていた考えが明確になり、自信を持って推薦入試に臨むことができる。

「面接を受ける生徒には、私たちを感動させるような話をしなさいと言っています。人の心を動かすくらいのが言えなければ、本人も覚悟ができませんし、進学後もモチベーションが続かないのではないのでしょうか」と、浜屋教頭は語る。

ロシアにバレー留学していた生徒は、帰国後、将来の目標が持てなかったが、面談を繰り返す中で「島根県とロシアの懸け橋になりたい」という思いを抱くようになった。一念発起して受験勉強に取り組み、ロシアと交流のある島根県立大学に合格し、入学式で新入生代表の言葉を任せられたという。

ここ数年、主体的に進路実現に向かう生徒が増えたのも一連の取り組みの成果である。探究クラブでは、生徒同士が自主的に面接練習に取り組みたり、志望理由書を見せ合い批

評したりする姿が見られる。また、海外の大学に進学したいという生徒も毎年現れるようになった。

生徒同士が学び合う場面も増えた。同校では全校で「Classi」(*)を導入し、生徒の自学自習をサポートしている。ある生徒がコミュニケーション機能を使つて質問すると、教師が回答する前に別の生徒が必ず答えを書き込む。なぜその解き方になるのか、といった議論が生徒同士で生まれることも多く、教える側も教わる側も理解が深まるという。

今後の課題は授業力の向上であると、大多和校長は語る。

「答えのない社会で学び続ける人材を育てるには、教師を乗り越えていくくらい、豊かな発想を持った生徒を育てなければいけません。そのためにも、何よりも教師自身の指導力、ファシリテート力を高める必要があります。先生方に研さんを積んでいただくとともに、生徒と教師がともに成長していける学校の風土・文化の醸成を目指していきたいと考えています」（大多和校長）

*株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

NIEや多様な言語活動を通して 自身の将来や学ぶ意味を考究する

山口県立下関南高校の課題は、「そこそこ志向」の生徒たちに明確な進路意識と高い目標を持たせること。

新聞を通して教科の学習内容と社会のつながりに気づかせるNIE、

進路選択の前提となる「考える力」を養う探究活動や言語活動、

自身の内面を深掘りさせる面談など、多様なアプローチで進路意識の向上を図っている。

殻を破り、自ら考え 行動する生徒を育てたい

山口県立下関南高校は、例年50〜70人が国公立大学に合格する単位制普通高校である。今でこそコンスタントに進路実績を上げる同校だが、10年ほど前には、国公立大学合格者が40人を切り、合格率が20%を割り込んだ時期があった。そこで同校は、2008年に進路指導部長になった松村成通先生を中心、それまでの推薦・AO入試を含めた多様な入試に向かわせる指導から、一般入試を中心に勝負させる指導へとかじを切

る。部活動などの特別活動にも十分に組み、そこで育んだ能力を生かし後期日程まで頑張り抜く生徒の育成へと指導方針を変えた。

「高い潜在能力を持っているのに、もかかわらず、目立ちたくないという理由で目標をあえて下げてしまう生徒や、保護者に気を使って県外に出ようとしないう生徒が多かったです。そういった生徒の能力を最大限に引き出すためには、十分に自分自身と向き合わせることから始めなければいけません。そして、殻を破り、自ら考え行動する生徒、粘り強く最後まで目標に向かって進む生徒を育成

しようと考えました」（松村先生）

受け身の姿勢は学習への向かい方にも表れている。3学年主任の橋本智子先生は言う。

「生徒は素直で真面目ですが、与えられた課題以上の学習に取り組むことはあまりありません。3か月後、半年後にどうなっていたのか、そのために今何をすべきかという見通しをもって学習計画を立てることがなかなかできません。特に中学時に塾を中心に試験対策をしてきた生徒は、勉強の仕方が分からず、自分が本当に理解しているのかどうかすら確認できないという生徒も少なくあ

りませんでした」

生徒の志を高めるための進路講演会や合格者講話（卒業生の受験体験談）、切磋琢磨する雰囲気醸成する勉強合宿などの新たな取り組みを次々と導入する一方、生徒の意識を途切れさせないように、それらの実施時期にも気を配った。例えば、1年次の夏季休業直前、緊張が途切れるタイミングを見計らって大学・企業訪問を入れた。弛緩した雰囲気になりやすい2年次2学期の修学旅行前には、進路講演会や学部・学科研究のワークショップを設けて将来と向き合わせた。



**山口県立下関南高校
橋本智子** はしもと・ともこ
教職歴19年。同校に赴任して12年目。
3学年主任。「嫌われることを恐れ
ずに本気でぶつかると」



**山口県立下関南高校
片山裕子** かたやま・ゆうこ
教職歴21年。同校に赴任して6年目。
1学年担任。「自分自身の心身の健
康を保つこと」



**山口県立下関南高校
松村成通** まつむら・しげみち
教職歴27年。同校に赴任して11年目。
進路指導部長。「生徒のために何がで
き、何をすべきかを常に考える行動する」



**山口県立下関南高校校長
齋藤嗣夫** さいとう・つくお
教職歴37年。同校に赴任して2年目。
「いつも笑顔で」

P・T・A進路講演会や保護者ガイダンスでは、生徒と保護者が一緒に、外部講師から教科の学びや将来の職業につながる講話を聞く。「本校の生徒は、『進学すると、親に経済的な負担をかけることになるかもしれない』『自宅通学できる範囲で志望校を選んだ方がよいのではないかなど』と、保護者にとっても気を使います。保護者にも学校の方針や大学・社会の現実を知っていただくことで、親子が

客観的な情報に基づいて、中・長期的な視野で進路を話し合えるきっかけを与えたいと考えています」と、松村先生はねらいを述べる。

NIEで教科の学びと社会とのつながりを実感

進路行事を充実させる一方、教科学習と社会とのつながりを意識させるために、同校では、新聞を授業に活用するNIE（*）にも取り組んでいる。家庭科では、人口減少や女性の労働、待機児童の問題、食品の

山口県立下関南高校

- 下関市立下関高等学校を前身とし、2016年に創立111年を迎えた。校訓は「日々磨かん智と徳と」。高大連携や地域ボランティアにも力を入れている。
- 設立 1905（明治38）年
- 形態 全日制・単位制／普通科／共学
- 生徒数 1学年約150人
- 2016年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、信州大、愛知教育大、岡山山、山口大、九州大、長崎大、熊本大、大分大、下関市立大、山口県立大などに73人が合格。私立大は、立命館大、近畿大、関西学院大、広島修道大、西南学院大、福岡大などに延べ164人が合格。
- URL <http://www.minami-h-jyos21.jp/>

安全など、授業内容に関連する記事を配布して読ませている。教科書で学んだことが実社会でどのように話題になっているのかを確認させ、15分程度で簡単な小論文を書かせることもある。家庭科担当の片山裕子先生は、「授業での学びと実社会の課題を関連づけてほしい」と思い、NIEは初任時から実践しています。新聞を読むことで、教科の学びと社会のつながりを知るだけでなく、私たちの生活や社会を変えていきたいという志や課題意識を持たせたい」と語る。

松村先生担当の地歴・公民科では、授業で使用するノートとは別に「新聞ノート」を生徒に用意させている。生徒は、気になった新聞記事をノートに貼って重要部分に線を引き、できれば数行のコメントを書いて毎時間先生に提出する（写真1）。先生も時々、コメントを書いて生徒に返す。最初は自分の趣味や好きなスポーツに関係のある身近なものが多かったが、回数を重ねるごとに視野が広がり、社会に目を向けた内容が

増え、視点も鋭くなっていくという。橋本先生の英語の授業でも、少数クラスで簡単な英字新聞を読ませて要約し、口頭で発表する取り組みを行った。

進学委員の生徒が執筆・編集を行う「進路通信」にも新聞が使われている。表面は生徒が伝えたい進路情報、裏面は新聞のスクラップで構成されており、裏面では委員の生徒が記事を選んで貼り、概要と感想を添

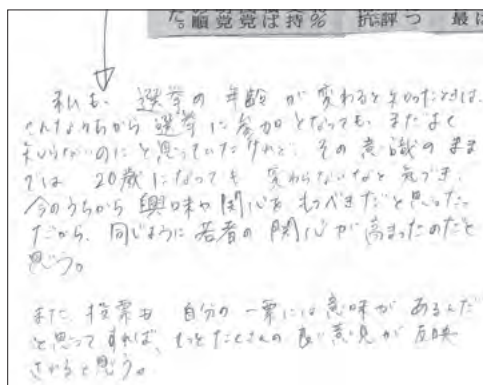


写真1 新たに選挙権を得た18・19歳の選挙の関心度合いについて書かれた記事を読み、自分のあり方を考え、意見を述べている。

* NIE(Newspaper in Education = 「エヌ・アイ・イー」)は、学校などで新聞を教材として活用する学習のこと。

える。齋藤嗣夫校長は、「授業や委員会活動など、様々な活動を通して生徒が新聞になれ親しみ、社会に関心を持つてくれるのは、とてもよいことだと思います。多くの学校で課題となっている主権者教育にもつながることを期待しています」と評価する。

探究活動と言語活動で考える力を育成する

社会とのつながりとともに教師たちが大事にしているのが、教科の学びや進路決定に必要な「考える力」の育成である。

16年度1学年の「総合的な学習の時間」では、課題図書を材料とした探究的な活動を取り入れた。生徒は夏季休業中に学校が推薦する約30冊の課題図書から2冊を選んで読み、そこから探究したいテーマを考える。担任や副担任から、「なぜ、そのテーマにしたのか。何を調べたのか。どうやって深めていくのか」といった指摘やアドバイスを受けながら、テーマを練り上げ、研究の方向性を定めていく。

テーマが決まると、関連する書籍

や新聞にあたって情報を掘り下げていき、探究の結果をレポート用紙3〜5枚にまとめる。あえてインターネットは使わず、複数の書籍や新聞から必要な情報を集めるのが決まりだ。片山先生は、「課題図書の選択やテーマ設定を通して、自分自身の興味・関心があるのかに気づかせ、大学進学のための学びの意味につなげたいと考えています。興味のあるテーマを深めたり広げたりする方法を学んでおくことは、大学進学の学びにも役立つはずです」と期待を込める。

松村先生が担当する地理では、読書と言語活動を連動させた取り組みを実践している。長期休業中に生徒が地理分野の書籍を選んで読み、その内容を休み明けに原稿用紙3枚分に要約して提出する。後日、松村先生が生徒一人ひとりと面談を行い、2分程度で内容の説明をさせ、何を学んだのかを聞く。例えば、土石流について学んだという生徒に、その場で発生のメカニズムについて問いかけたが、答えられなかったため、面談は後日やり直しとなった。その場で質問されるので、要約の内容の

丸暗記では対応できないのだ。1回で合格する生徒はまれで、ほとんどの生徒が2、3回面談を繰り返すという。

「NIEは、情報や知識を広げることには役立ちますが、それだけでは不十分だと考えています。書籍で知識を深めると同時に、要約や内容説明を通して、自分の得た情報を分かりやすく伝える技術も身につけてほしいと思っています」(松村先生)

生徒主体の面談により進路意識を掘り下げる

生徒の進路意識をより深化させるために、同校では面談を重視している。年間で生徒1人につき3〜5回、机を挟んでの面談が行われる。

多くの教師が心がけているのは、徹底的に生徒に考えさせることだ。片山先生は、生徒が大学選択における「譲れない条件」は何かを考えさせ、そこから適性や興味・関心を引き出していくという。

「生徒が何を望んでいるのか、将来就きたい職業や学びたい学問は何か。留学がしたいのか、資格が取りたいのか。これだけは実現したいこ

とは何かを考えさせ、大学に行く意味を問いかけるようにしています」(片山先生)

松村先生が進路指導部長の立場で行う全員面談も同様だ。松村先生は毎年、2年次2〜3学期と3年次1学期の計2回、すべての生徒と面談を行う。そこで先生は徹底的に生徒の声を聞く。将来何がしたいのか、なぜ、その学部に進学したいのか。生徒が答えやすい聞き方で質問し、メモは取らず、生徒の目をしっかりと見て生徒の気持ちを引き出していく。

「教師がよかれと思ってあれこれとアドバイスしすぎると、生徒はこちらに合わせようとする発想を失ってしまいます。保護者の価値観に縛られている生徒もいるので、せめて私の面談では、自分と向き合う機会を保障したいと考えています」(松村先生)

生徒によつては、担任と松村先生、生徒と保護者の4者面談になることも少なくない。「若手の教師にとつては、松村先生を交えての面談は大きなプレッシャーであり、またなにか研修の場でもあります。どのよう

に生徒から情報を引き出してアドバイスを与えるのか、若手にとって非

常に勉強になると思います」と、齋藤校長は語る。

生徒と向き合うのは担任の仕事だが、担任が安心して面談に打ち込めるのも、学年団で生徒の情報を共有しているからにほかならない。同校

では学年会が時間割の中に組み込まれており、学年団が毎週顔をそろえて生徒の情報を共有している。担任が教科担当から気になる生徒の情報を得て面談の参考にしたり、伸び悩んでいる生徒の支援を教科担当に依頼したりすることで、担任1人が負担を背負い込むことのないように配慮している。また、管理職と学年主任、担任団、進路指導部が一堂に会する進路検討会議を、2学年は1回、3学年は3回行っており、そこで共有した情報が面談に生かされることも少なくない。

試験前日まで粘り強く 進路実現に向かう生徒たち

ここ数年、同校の生徒が受験する大学入試の主流は推薦・AO入試から一般入試へ切り替わった。模試は

3年次の最後まで5教科7科目を受験し、早くから3教科に絞る生徒は1割に満たない。明確な志望動機を持つ生徒が後期入試まで頑張り抜く姿を、教師たちは頼もしく見つめている。

「いったん目標が決まれば、それに向かつて猛進していくのが本校の生徒の素晴らしい点です。本校では基本的に土日も教室を開放しており、特に入試前は教科、小論文、面接、体育や芸術の実技など、個別入試に向けた指導を全教職員で行いますが、試験前日の夜まで指導を受ける生徒たちが見られることは、教師冥利に尽きます」(松村先生)

過去には、看護系の志望者が自主的に集まって、面接対策のための「看護ノート」を作った例もある(写真2)。「どんな看護師になりたいか」「高校生活で得たもの」などを書いて持ち寄り、互いに批評し合ったり励まし合ったりして、自律的に進路実現に向かっていった。

県外に出る生徒も徐々に増えており、大学で顕著な学業成果を上げる

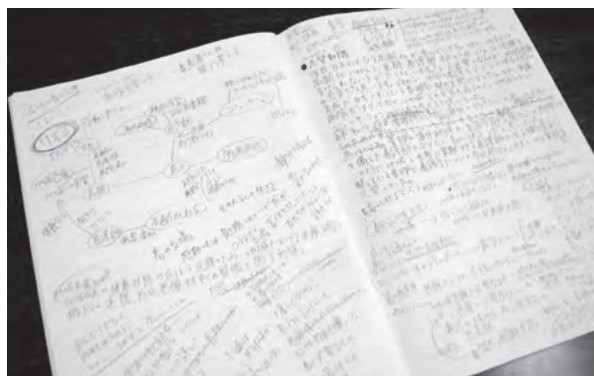


写真2 看護系の志望者が作成した「看護ノート」。細かいメモやマインドマップなどに思考の跡が見える。

卒業生も現れるようになった。当初、地元の公立大学を希望していた女子生徒は、進路指導を通して奮起し、東北の国立大学に合格。実家からの仕送りがほとんどない中で、海外留学やボランティアに積極的に参加し、大学の大使として東欧やアフリカへ派遣されるまでになった。

「大学入学後の大きな飛躍は、在学中に自分の将来を真剣に考えた成果だと思っています。自分の好きな学問に打ち込んで、世界中を飛び回る卒

業生の活躍が、在校生に勇気を与えています」(松村先生)

もちろん、課題もある。その1つが、組織的な進路指導体制の確立だ。現在は松村先生を始め、ベテランの教師たちが個の力で支えている面がある。次代のリーダーを育てると同時に、誰が携わっても成果を上げられる進路指導の流れをつくり、根づかせていくことが必要だという。

進路意識の成熟度が二極化している点も、課題の1つだ。

「面接指導をしていると、しっかりと志望動機を語れる生徒が確実に増えていることを実感する一方、3年次になっても志望があやふやな生徒の存在にも気がつきます。保護者や友人の意見に安易に流されることなく、大学へ行く意味を明確に、そして自分らしい言葉や文章で表現できる力を育てることが、進学意欲を高め、大学生活を充実させることにつながります。生徒の人生をよりよいものとするための大切な指導として、本校の進路指導をさらに磨き上げていきます」(齋藤校長)

教育活動の意義、目的を自由に語り合い、
自校の生徒にふさわしいゴールを描く

探究学習及びアクティブ・ラーニング（以下、AL）の開発に取り組みながら、教育活動全般の改善に取り組み龍谷大学付属平安中学校・高校。今回は10月、11月に行われた探究学習・ALのコンセプトづくりの様子をレポートする。

10月●探究学習・ALの意義・目的の明確化

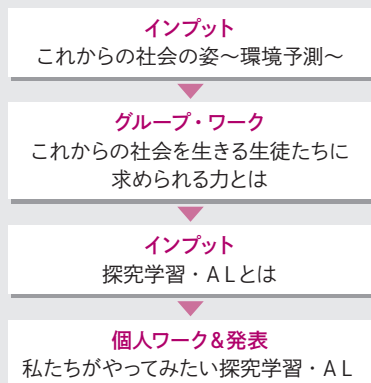
開発の意義と必要性を共有する

2017年度からの探究学習・AL導入を見据えて、カリキュラム・マネジメント委員会を中心に検討を開始した龍谷大学付属平安中学校・高校。その第一歩は、これからの社会で、どのような力が求められているのかを確認しながら、探究学習・ALの意義・目的を話し合うこと。サポートスタッフとして参加したベネッセ社員による「これからの社会の姿」についての解説を踏まえて、「社会で求められる力」を教師が語り合った。

そして、本誌16年度10月号の特集に掲載した関西大学の黒上晴夫教授のインタビュー記事を基に、探究学

習・ALのアウトラインを確認した後、自校における探究学習・ALのイメージを出し合った。探究学習・ALを考える際に、何に重きを置くか、同僚との対話の中で共通点と相違点を確認していった。

意義・目的の明確化のフロー



会議に参加した教師からは、「新しいものを生み出す主体的な学びの姿勢を育むことなくして、これからの社会に対応できる生徒を育てることはできないと確信した。目標が見えてきた満足感と同時に、喫緊の課題であるのだという危機感も感じている」「教科と部活動、さらに学校行事を生徒の主体的な学びの場として連携させたい。学校総体で考える視点が重要だ」といった声が上がった。



教科や分掌、教職歴の異なる教師が集まり、これからの社会で求められる力と、それを育むために求められる指導について、リラックスした雰囲気の中で話し合った。

11月●探究学習・ALのコンセプトの作成

ゴールイメージが徐々に明らかになる

10月の会議の内容をさらに掘り下げ、自校の探究学習・ALの軸、コンセプトをつくるため、「育みたい力」

「そのための指導」を校内で広くヒアリングし、その結果を共有することから11月の会議はスタートした。校

探究学習・AL開発のフロー

同校では、以下の流れで探究学習・ALの開発が進められている。校内の検討が活発化するように、どのような配慮がなされているかを、サポートスタッフとして参加するベネッセ高校営業部・若榮寿美が解説する。

10月

学習の意義・目的の明確化

社会のこれからとそこで求められる力、そして探究学習・ALについて自由に語っていただくため、4、5人の小グループを基本に活動を進めていただきました。また、最初から探究学習・ALについて考えるのではなく、先生方にとって身近な、そして何より大切な「育てたい生徒像」から話し合っていたいただいたことで、意見が出やすかったように思います。

11月

学習のコンセプトの作成

「探究学習・ALで育みたい力」「その実現のための教育活動」を、小グループで話し合っていました。その際、メモや付せんに思いついた言葉をとにかく書き留めていただきました。文字にすることで、グループ全体で各自の考えや思いを可視化できるようになり、何気ない言葉をほかの人がさらに深めたり、別の視点で展開させたりしやすくなりました。

12月

学習のコンセプトの具体化 (どの教科、行事でどのような探究学習・ALを行うのか)

1月

カリキュラム案の作成・検討

2月

カリキュラム決定と その実施のための to do の整理

今回、取り組んだ内容

今後の予定



検討会に参加する教師は、自教科のほかの教師の意見を事前にヒアリングし、会に出席した。できるだけ校内から広く意見を取り入れるための工夫だ。

内から集まった意見を付せんやメモに書き、その共通点をグループで考

えていく中で、学習のコンセプトにつながるっていくキーワードがいくつも浮かび上がってきた(下図参照)。それらのキーワードをさらに精選する中で、「授業、行事を連携させて、生徒自身に『学びの文脈』を描かせ、教師が手を離しても学び続ける力を育む」といった、ゴールイメージが練り上げられていった。

探究学習・ALの場として機能させるものを選定すること」を次回までの課題として校内で検討することが決まった。また、各教科の授業においても、学校行事と連携しながら探究学習・ALを実施していくことが共有された。そのため、今後の検討会議では必要に応じて参加人数を増やすのと同時に、検討の進め方についても、当初の想定を踏まえつつ、さらに柔軟に創意工夫を加えながら吟味することになった。

コンセプトの検討過程で挙げたキーワードなど

主体的な学び	自学自習	じっくり考える
考えを伝える	論理的思考力	
研究授業の充実	不易と流行の整理	
文章で答えさせる発問	教師不在の学び	
正解が1つではない問い	教えずがない授業	
学びの目的の明確化	教師の独自性の尊重	
各教師のウリの再確認	生徒がつくる質問	
社会との接続		

ハートも
こがせ!

Vol.11

静岡県立浜松北高校

運動会

目指すは優勝!

学年を超えて、

120人が一致団結

各自の得意分野を生かしながら
最高のものをつくり上げる

静岡県立浜松北高校の運動会は、1〜3年生の各1クラスで1つのブロックを組み、全10ブロックで競う。ブロックを率いる3年生の各クラスでは、ブロック長、統制長、競技長、ST(ショータイム)長、デコ長、衣装長、救護長の「七長」を決め、クラス全員がいずれかのチームに所属する。そして、夏休み中に各チームで話し合い、STの振りつけや衣装のデザイン、デコの図面などを完成させておき、夏休みが明けたら1・2年生を交えた練習にすぐ入れるようにしておく。9ブロックST長の仲間翔子さんは、常に手帳を持ち歩き、思いついた振りつけを書きとめ、チームに提案していった。「ダンス経験者でない人からもよいアイデアが出て、選曲も振りつけもチームで話し合って決めました。また、1度決まっても、前後の流れで考え

直すという作業を何度も繰り返しました」

9ブロックのデコは、羽が手で動くハチを制作した。デコ長の石津日向子さんが「今までにない動くデコにしたい」と提案したところ、物理が得意な生徒から滑車を用いて羽を動かす案が出た。「9ブロックのよさは、各自の得意分野が違うところだ。理系の人が動く仕組みを考えて、美術

大学志望の人がデザインを担当し、私はメンバーが作業に集中できるように、材料の準備や企画書作りなど、事務作業を引き受けました」(石津さん)そして、総勢120人をまとめるのがブロック長だ。9ブロック長の加藤諒さんは、1・2年生が楽しめるように頻繁に声をかけ、本番に向けて士気を上げるとともに、全体を見渡すよう心がけた。

「夜7時に練習が終わると、七長が集まって課題を共有し、例えば、デコの制作が遅れていれば人手を増やし、気になる後輩がいれば面倒を見る3年生を充てるといいうようにすぐに対応しました」

教師の思い

リーダーとフォロワー、
それぞれの経験が
生徒を大きく成長させる



静岡県立浜松北高校
澤木和弘
さわき・かずひろ

教職歴32年。同校に赴任して4年目。生徒指導部生徒会担当。3学年担任。

勝ちへのこだわりが
チームワークにつながる

3年生は、高校3年間の総決算として運動会に全力投球します。1・2年生の時には部活動の試合などで参加できなかった生徒も、部活動の引退後ですから積極的にかかわりますし、先輩たちの姿に憧れ、3年生になったら「七長」としてチームを引っ張りたいと思っている生徒も大勢います。

また、本校の生徒は競争意識が高く、学校祭でのクラス展示でも優勝を決めますし、合唱大会では全30クラスの順位を発表するほどです。そうした「勝ちたい」という思いが、それぞれの得意分野で力を発揮し、協働することにつながっていると感じます。その結果、特定の生徒が毎回リーダーを務めるのではなく、例えば、学校祭でのリー

全力でチームを率いたからこそ 勝っても負けても得られるものがある

各ブロックの表舞台を裏で支えるのが、運動会運営委員会だ。1・2年生の有志約100人が総務や競技などの係に分かれ、練習場所の割り振りや道具の貸し出し、当日の会場整備や出場者の誘導、審判など、運営のすべてを担う。今年は騎馬戦に代わる新競技が加わり、委員長の鈴木奏丞^{そうすけ}さんは、その調整に奔走した。

「委員会では新競技を何度も試行し、これなら盛り上がるというルールを設定しました。でも、本番は必ずしも成功とは言えない結果に終わりました。課題は申し送りし、来年、後輩たちに託します」



デコは模型やC Gなどで完成予想図と図面を作成してから制作に入る。巨大なオブジェのため、安全面や構造面もしっかり考えて作られる。



運動会当日は快晴。優勝は10ブロック。9ブロックはデコ大衆賞2位、フェアプレー賞を獲得した。「みんなの意見を取り入れて、計画を立て、問題が起きて、妥協するところは妥協し、譲れないところは最善策を考える、そうした意志と実行力がついたと思います」(石津さん)

「STでは賞が取れず、悔しかったけれど、最後に全校生徒が輪になって『生徒の歌』を歌った時、北高は1つなんだと思いました」(神間さん)
「運動会後、後輩から『9ブロックでよかったです』と言われ、自分の目標が達成できたと思えました。チームをまとめるためには、やらせるのではなく、自分からやりたいと思ってもらえるようにすること、その大切さを学びました」(加藤さん)

加藤 諒 かとう・りょう

3年生。9ブロック長。漕艇部部長。「入試への影響を心配して七長になるのを後輩がためらわないよう、自らが現役合格に向けて力を尽くします」

神間 翔子 かま・しょうこ

3年生。9ブロック・ST長。茶華道部。「人には適材適所があり、得意なことでも貢献することの大切さを感じました」

石津 日向子 いしづ・ひなこ

3年生。9ブロック・デコ長。英語ディベート部。「チームで協力して準備を進める経験を通して、話をしっかり聞く姿勢が身についたと思います」

鈴木 奏丞 すずき・そうすけ

2年生。運動会運営委員長。軽音楽部。「来年はブロック長になり、今年以上に盛り上がる運動会にしたいと思っています」

ダーが合唱大会ではフォローに回るなど、生徒は指示する側と支援する側との両面の経験を積めるのです。

指導者の立場を経験できる 重要な教育活動の1つ

運動会を通して、3年生は上級生としての自覚が生まれ、大人になっていきます。120人もの人を率いる経験は、社会人になってもそうできないでしょう。地域や日本、そして世界のリーダー的存在となる人材を育むことを目標とする本校では、指導する側を経験できる運動会は重要な教育活動です。本校の建学の精神「自主独立」を具現化する行事だという共通理解を教師は持ち、見守ることに徹しています。そして、本格的な受験勉強態勢に入る切り替えの行事として、3年生にとことん打ち込ませるのです。

静岡県立浜松北高校

◎建学の精神「自主独立」を基盤とし、広く世界的視野に立つて人類の発展に寄与できる人間の育成を目指す。部活動も盛んで、洋弓部、漕艇部、百人一首部、英語ディベート部などが全国的に活躍している。

◎設立 1894(明治27)年

◎形態 全日制・定時制／普通科／国際科／共学

◎生徒数 1学年約400人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、北海道大、東京大、静岡大、浜松医科大学、名古屋大、京都大、大阪大などに171人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ548人が合格。

◎URL <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/hamamatsukita-h1/home.nsf/IndexFormView?OpenView>

実践
アクティブ・ラーニング

物理



この日に取り組む予定の(1)～(3)の3問が書かれた演習プリントを配布。まず、(1)について問題文のポイント(どのようなことを問われているのか)を説明した。平易で、字数の多い問題文を長々と生徒に読ませるよりも、考えさせる時間を優先したいという岡本先生。問題文の質によっても授業は変化する。

●理数科学科2年生の「物理」の授業。「万有引力、単振動、遠心力」の単元(9時間)の最後の授業で、入試問題を基にした3つの問題を使った演習となる。複雑な解法テクニックが備わっていないくても、原理原則が身につければ入試レベルの問題に対応できることを実感することが目標だ。(P.35に授業デザインを掲載)

スマホとぼそぼそで
学びの集団性を維持しながら、
個々の学びを最大限尊重する

岡本先生のアクティブ・ラーニング

スマートフォンで撮影した生徒のノートを
投影し、鍵となる「図」を全員で読み解く

演習形式となったこの日の授業では、岡本直樹先生が過去の入試問題をアレンジして作成した独自問題が使用された。(1)は、鉛直面内の円運動を題材に、各物体に働く力を考える問題だ。生徒の解答はほぼ2つに分かれたが、自分の解答の正当性は説明できるものの、もう一



富山県立富山中部高校

岡本直樹 おかもと・なおき

教職歴13年。

同校に赴任して4年目。2学年担任。

アクティブ・ラーニングの実践は7年目になる。

富山県立富山中部高校

◎全人教育の理念と「鍛錬・自治・信愛」の伝統的精神を継承し、健全な心身、優れた知性、豊かな情操を培い、民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努める。

◎設立 1920(大正9)年

◎形態 全日制/普通科・探究科学科(理数科学科、人文社会科学科の総称)/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2016年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、東京大、東京工業大、京都大、大阪大などに207人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、早稲田大などに延べ383人が合格。

◎URL <http://www.chubu-h.tytm.ed.jp/>

09:55 ノートを投影し、共有する



スマートフォンで撮影したノートをプロジェクターで映し、生徒の解答を解説。「みんなの答えは、おおむね2つに分かれていますね。では、自分が正解だという理由ではなく、もう1つの答えが間違っているという理由を考えてください。人と相談しないで、まずは自分で考えて!」と岡本先生。しばし沈黙思考する生徒たち。

09:50 生徒のノートを撮影する



岡本先生の「図を描きながら解こう」という言葉を合図に生徒が問題を解き始めた。先生は机間巡視しながら、数人のノートをスマートフォンで撮影。5分ほどして「隣近所でぼそぼそ話してみても」と先生。生徒は机を動かすことなく、近くの人と小声で相談。先生は生徒のつぶやきを拾い、「手を離れた瞬間のスピードは?」などと助言し、机間巡視を続けた。

方の解答が間違いであることを説明するのが難しいという、物理が得意な生徒にとってもなかなか厄介な問題だ。

「この問題は、正答率は低いですが、正解にたどり着くまでに、実は難しいテクニックを必要とします。この単元の中でそれまで学習してきた原理原則をきちんと理解しているかどうかを見るのに、とても適した問題なのです」

授業中、岡本先生は机間巡視をしながら生徒がノートに描いた図をスマートフォンで撮影し、プロジェクターに映し出すことがある。(1)の問題でも、答えが異なる2つの解答プロセスを撮影し、全体で確認しながら、「この図を見て、なぜ自分とは答えが違うのか。間違っている理由を考えて」と問いかけた。

「物理では正しく図を描くことが重要です。計算間違いの原因をたどると、図に間違いがあることが少なくありません。図の中に矢印1本を描けるかどうか重要な科目だからこそ、生徒が描く図は最良の教材です。とはいえ、生徒が板書すると時間もかかりますし、授業が中断することもあります。ICTは、生徒のノートの図を素早く映し出すことができるので、積極的に活用しています」

周囲との語り合いは 学びの選択肢として生徒に委ねる

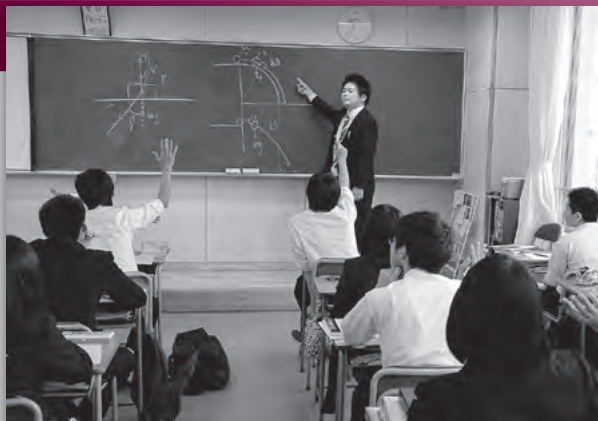
授業では、岡本先生の「ぼそぼそ話してみても」

という言葉で、生徒同士の対話の場面が頻繁に訪れる。この日は、生徒が机を動かすことはなく、その場で体を左右、後ろに向けて、思い思いに近くの生徒と話すことを繰り返した。生徒の中には、ほかの人と話し合わず、1人で考え続ける生徒、教壇に立つ先生に質問や自分の考えをぶつける生徒もいた。

「授業中に話し合いの時間を意図的に設けることで、1人では解けない問題をみんなで解くことができる」と岡本先生もグループワークの価値を認めている。実際に、以前勤務した学校では、授業は最初から最後まで生徒をグループにして行い、特に中下位層の学力の底上げに成功したという。しかし現在は、いつ、どんなグループワークを行うかは、生徒の様子を見ながら臨機応変に決めている。

「最難関大学を目指す生徒が多い本校には、自分1人でじっくり考えて解答を導き出したいという生徒も多くいます。ですから、私の授業では、机を動かしてまでのグループワークはそれほど多くは取り入れてはいません。ただ、学力の高い生徒でも、1人で頭をフル回転させているうちに、ほかの見方、考え方に気がつかなくなっていることがあります。視野を広く持たせたいと判断した時に、『ちょっとぼそぼそ話してみても』と声をかけるようにしています」

生徒にとって岡本先生の「ぼそぼそ……」は、授業の山場を知る合図でもあるのだ。



クラスの中で「2つの答えのうち、どちらが、なぜ間違っているか」を説明できる生徒が現れ始めた。さらに岡本先生は、「静止していないのに、つり合っていると言っているの？」などと生徒に問い、教室全体の理解を確認。原理原則に立ち返ることの大切さを改めて生徒に訴え、次の問題へと進んでいった。



再び「じゃあ、隣近所でぼそぼそ話してみて」と促す岡本先生。むしろ活発に、わいわいと話し出す生徒の声を拾い、「つり合いの式は?」「物体はどう動く?」など、教壇の上で生徒とポイントを確認しながら板書を進めた。その間、ある生徒は近くの人と意見交換を続け、別の生徒は板書中の先生に自分の気づきを率先して説明していた。

思考の活性化・深化への配慮

全員がやりがいを感じる問題と 没頭する発問を準備する

岡本先生は「アクティブ・ラーニング（以下、AL）とは、一言で言えば生徒の頭がフル回転している状態」だと考える。そして、ALの成否を分けるのは教師の事前の教材研究だと断言する。

「特に本校の場合は、全員がジャンプしてようやく手が届くような問題、すなわち、原理原則の深い理解が問われるような問題を提示することが求められます。その上で、生徒が集中し、一人ひとりの呼吸の音が聞こえるくらいに没頭するような時間になる発問をしたいのです。今回の授業であれば『解答が二分する問題』『間違いの理由を説明することを求める生徒への発問』がそれにあたります」

実際、この日の授業では岡本先生の想定通り、生徒の解答は二分し、また最初から「もう1つの答えが間違いである理由」を説明できる生徒はおらず、先生の問いかけに応じるように、ぼそぼそと生徒同士が対話し、考える中で、少しずつ正解に近づいていく様子が見られた。

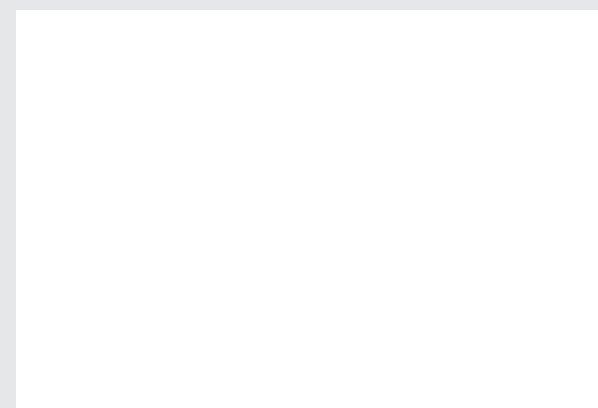
「それぞれが正解にたどり着いたと思っっているのに、実は誰もその理由を正確には説明できない。そうした良問を前にとすると、生徒は自然と近くの仲間へ声をかけて『あなたと私の答え

はどこで違ったのだろうか?』と話し合いたくなるものです。私から、『話し合って!』と言わなくても、生徒が自ら、しかも自分のペースでそうしたくなるような授業展開ができれば、グループワークの要素、醍醐味は授業におのずと生まれてくるのです」

場づくりへの配慮

「ぼそぼそ」に耳を澄ますことで それぞれの学びのペースを尊重する

同じ授業に臨んでいても、「あと少しで何かが見えてきそうだからヒントがほしい」という生徒もいれば、「今は話し合うよりも、自分1



模型を使って、実際にどのような力が働くのかを確認する。岡本先生は生徒に「指にかかる力はどうな力?」「なぜ指は上に動いているの?」と問いかけ、自分の指で感じた力の向きやその理由を説明させ、教室全体で共有した。

授業デザインシート

【教科・科目】理科・物理

【分野・単元】力学・万有引力、単振動、遠心力

【テーマ・作品】万有引力、遠心力

【設定時数】9時間中の9時間目

【本時全体の目標】遠心力の性質、力のつり合いを原理原則に基づいて理解する。

学習内容	本校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
授業の目標	本授業の目的・目標を理解し、達成点を理解する。	- 技能 - 主体性	【教師】 授業の目的、達成点を提示する。 【生徒】 授業の目的、達成点を理解する。		
ひものついた物体が円運動をし始める際の張力	遠心力の原理原則に基づいた考えができる。	- 技能 - 思考力 - 判断力 - 協働性	【教師】 ほかの生徒の解答を見て、自分と違う解答が出てきた時に、なぜ違うのかを考えさせる。教師が指示しない限り、ここまではまず1人で考えたい生徒が多い。時間を見て周りの生徒同士で意見交換させる。ほかの生徒の意見を聞いて納得した表情をした生徒に「なぜ、ははーんという表情をした?」と聞く。その生徒の説明を聞いたほかの生徒も納得した表情をするかもしれない。さらに、生徒の発言をつなぐ。 【生徒】 プロジェクターで映し出された図を見て、解答を確認する。片方が正解で片方が不正解であるため、不正解であるものについて、その理由を考える。	「点Aで手を離れた瞬間の張力は?」 「式を立てる前にどんな図を描いたか確認しよう」 生徒の描いた図をスマートフォンを使って、プロジェクターで映し出す。	2つの解答 ($T=mg\cos\theta$, $T=mg/\cos\theta$) が得られると予測される。→どのような図を描いているかを見る。 映し出された図を見た瞬間の生徒の表情を確認する(驚き、納得できた表情かどうか)。周りの生徒との意見交換で、間違いが分かった瞬間の生徒の表情(驚き・納得)を確認する。
中心の物体の動く条件	物体に働く力がうまく図示できる。	- 技能 - 思考力 - 判断力 - 協働性	【教師】 ほかの生徒が描いた力の図を見て、自分が描いた図とは違う力の矢印が描かれていた場合はなぜかを考えさせる。正解が出ない場合は、装置の状態を生徒に考えさせ、身近なもので代用できないかを考えさせる。 【生徒】 なぜ張力が2本働くのか分からない場合は、それを体感するためにどのように物で表現すればよいか考える。	「ひもが釘にあたった時の物体に働くつり合いの式を書こう」 生徒の描いた図をスマートフォンを使って、プロジェクターで映し出す。生徒から正解が出ない時(張力が斜め下方向しか描いていない状態の時)は、「斜め下方向の張力が加わったら垂直抗力はどう変化する?」と発問。 「実際に手元にあるものでこの状態を再現してみよう。本当に張力の方向はそれでよいのか?」	張力のもう片方を考慮しない生徒が多数いると思われる。→張力の鉛直上方向の矢印が描けるかどうか。 映し出された図を見た瞬間の生徒の表情(驚き・納得)を確認する。
円柱表面を転がる小球の運動と水平投射	円柱表面を転がる小球に働く力、水平投射で働く力から分かる小球の加速の様子を理解する。	- 技能 - 思考力 - 判断力 - 協働性	【教師】 2つの図の描く軌道が似ているので(実際は似ていない)、水平方向に進む時間の差はないように感じる生徒がいると思われる。まずは1人で考えさせてから生徒同士で確認させる。時間の差が垂直抗力が働く差だということが分かった生徒の中には、間違っただけの速度にも違いが生まれるのではないかと考えてしまう生徒もいると思われる。まずは1人で考えさせてから、生徒同士で確認させる。次に鉛直方向に同じ距離を進む時の時間を聞いてくる生徒もいると思われる。 【生徒】 なぜ水平方向に進む時間が違うのかの理由を考える。	「2つの図を見て、違う部分はどこか?どこかの力が違ってきているのか?」	円柱表面の小球に働く力をうまく描けているか。 垂直抗力は進行方向に垂直でエネルギーを増加させていないことに気づくかどうか。
まとめ	原理原則に基づいた考え方ができたかどうか。	- 技能 - 思考力 - 判断力	【教師】 難しい問題だが、どれも原理原則に基づいた考え方ができていない。それに気づくことが大切だということを伝える。		

*岡本先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

人で考えたい」という生徒もいる。また、全体のペースを上回るスピードで内容を深く理解している生徒もいる。そのため岡本先生は、周囲と相談するかどうかを、生徒一人ひとりが自由に判断できる雰囲気づくりを心がけているという。「話し合って」とは言わずに「ぼそぼそ話して」と声をかけるのは、岡本先生の生徒への配慮の表れだ。また、授業の流れを止めて1人の生徒に発言をさせる場面は少なく、岡本先生が教室のあちこちから生徒が発する「ぼそぼそ」を拾い上げ、授業をつなぎ、くみ上げていく。

「授業中の対話は、視野を広げるきっかけとして重要ですが、一方で集中を妨げる雑音にもなりえます。だから私の授業では、『ぼそぼそ』がよいのです。その分、私が生徒の声に集中します。板書中、背後から聞こえたつぶやきを『今、Aさんが面白いことつぶやいたよね!』と逃さずに拾うのは、随分上手になったと自分でも思います」

とはいえ、生徒たちは決して小声でも寡黙でもない。特に解答の糸口が見え始めた頃には、「ぼそぼそ」という言葉があてはまらないほど、生徒たちの声のボリュームは原理原則の大切さを確かめるように大きく上がっていた。

「集団」というメリットを生かしながらも、何よりも個への学びの成果の還元を最重要視するのが、高い志望を持つ生徒が多い教室の中で岡本先生が目指すA.Lなのだ。



◎釧路市に隣接する釧路町唯一の公立高校。校訓は「自主協調・創意実践・進取激刺」。2010年度、「北海道高等学校キャリア教育推進事業」の研究推進校に指定。直木賞作家、オリピック出場選手など、卒業生が様々な分野で活躍している。

設立

1978(昭和53)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約130人

2016年度進路実績(現役のみ)

公立大は、釧路公立大に4人が合格。私立大は、札幌大、札幌学院大、北海道情報大などに延べ9人が合格。短大、専門学校進学 56人(うち看護系6人)。就職 62人。

住所

〒088-0618
北海道釧路郡釧路町富原3-1

電話

0154-36-2750

Web Site

<http://www.kushirohigashi.hokkaido-c.ed.jp>

北海道 釧路東高校

基礎学力向上

独自教材とテスト結果を活用した学び直しで、学力の底上げを図る

変革のステップ

背景

◎市内の高校再編により、入学者の学力低下が課題に。今後も同様の傾向が続くと推測される中、学校全体での学力の底上げが必要となる

実践

◎独自教材の学び直し「ベーシックスタディ」を推進。また、テストを活用した詳細な分析や、成績下位層のための「基礎力講習」を実施

成果

◎生徒の学習に向かう意欲や、基礎学力が著しく向上。国公立大学を目指す生徒も増加

釧路市内の高校再編で 成績下位層の生徒が増加

北海道釧路東高校で学び直しの検討が始まったのは、2011年のことだ。公立高校の統合、再編において、近隣の高校が閉校。その影響で、同校では、入学者の学力が相対的に低下していることが課題となっていた。今後も同様の傾向が続くと予測されたため、学校全体で学力を底上げする体制を整えようと、当時の校長が発案したのだ。同校に赴任して13年目となる弥田将人先生は、こう振り返る。

「私が赴任した頃は、持ち回りで校内巡回を行うなど、生徒指導の徹底により、ある程度落ち着いていましたが、時には授業が成立しないこともありました。生徒たちが落ち着いて授業に集中できる環境を整えるために、生徒指導だけでなく学習指導も強化していく必要がありました」

卒業生の就職先から、義務教育段階の学習内容の定着度について指摘を受けたこともあり、基礎学力向上は喫緊の課題だった。そこで、弥田先生ら数人の教師が、関東近郊の学び直しに取り組み先進校を視察して指導ノウハウを収集し、小・中学校段階の学習内容からなる5教科の独自教材を作成するなどした。そして、12年度1年生(35期生)から、週2時間の学校設定科目「ベーシックスタディ(以下、BS)」を始めた。

書写と学び直しによって 基礎学力の定着を図る

BSの授業は、生徒の自学自習で進められる。50分間の授業のうち、前半20分が国語と英語の書写、後半30分が各教科の学び直しだ。書写では、担当教師が小説や評論などの課題を選び、



恩塚 寛 おんつか ひろし
北海道釧路東高校
教職歴29年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。「情報は保護者・同僚と共有し、チームプレーで結果を出す」



森下 貴秋 もりした たかあき
北海道釧路東高校
教職歴21年。同校に赴任して5年目。教務部長。「おこり高ぶることなく、常に学ぶ姿勢を大切に」



諸橋 征爾 もろはし せいじ
北海道釧路東高校
教職歴20年。同校に赴任して6年目。1学年主任・教務部副部長。「あたり前のことがあたり前にできる生徒を育てる」



弥田 将人 やだ まさと
北海道釧路東高校
教職歴17年。同校に赴任して13年目。生徒指導部長。「自分が必要なくなるように、自分のできることを、楽しみながら、補助輪のイメージで」



阿部 義之 あべ よしのぶ
北海道釧路東高校
教職歴10年。同校に赴任して5年目。生徒会部。「誰とでも優しく、誰にでも親切に」

生徒に書き写しをさせる。優れた文章や多様な考えに触れて表現力を高め、長い文章を集中して書くための運筆力をつけることがねらいだ。教科の学び直しは、1回の授業で1教科とした。「反復は力なり」をキャッチフレーズとし、国語、地歴・公民、数学、理科、英語の基礎的な問題のプリント(図)に繰り返し取り組む。例えば、国語は小・中学校段階の漢字練習、数学は小数・分数などの計算問題、化学は基本的な元素記号や化学式の復習といった内容だ。プリントは、各教科の教師が分担し、作成した。表には問題、裏には解答を印刷しておき、

「ベーシックスタディ」理科

The worksheet contains several sections: a periodic table with element names in Japanese, a table of chemical formulas (e.g., H₂O, CO₂, NH₃), and various problems for students to solve. The problems are numbered and include instructions for students to write their answers.

*学校資料をそのまま掲載

生徒は自力で問題を解き、分からない問題があれば、プリントをめくり、自分で答えを確認しながら進めていく。自学の習慣を身につけることも、BSの目的の1つだからだ。

授業の担当は、学年・教科にかかわらず、すべての教師でローテーションを組んだ。生徒の自学形式にしたのは、授業が教師の負担にならないようにという配慮もあった。

プリントの取り組み状況を見れば、生徒たちがどこでつまづいているのか、どのような知識が不十分なのか分かり、それを通常授業の指導に生かすことができた。教務部長の森下貴秋先生は語る。

「机間巡視をしながら生徒が解いている様子を見てみると、小・中学校段階の学習内容のどこが抜けているのか、どこが弱いのかについて改めて気づかれます。そこで、多くの生徒が苦手としていて、通常の授業で必要となる前提知識を、BSのプリントに盛り込むようにしました。あらかじめBSで学習させておくことで、授業の導入がスムーズになりました」

教師のアンケート結果を基に こまめに教材を見直す

生徒の状況に応じてプリントを毎年少しずつ改善していることも、BSが機能している理由

の1つだ。毎回、授業を担当した教師にアンケートを取り、問題の難易度、問題量、解答時間などに対する生徒の様子を回答してもらう。それを教務部が集約して各教科担当に伝え、難易度や問題量などを見直す。また、書写は、旬の話題をテーマとする場合も多いため、頻繁にテキストを入れ替えている。

BSを始めた当時、2・3年生ではBSは学校設定科目に設定されていなかった。そこで、35期生については、2・3年生でも弥田先生が自身の授業で書写と国語のBSを継続した。すると、それまでの学年にはなかった変化が表れたという。

「それまでの学年と比べて、明らかに、生徒の様子が落ち着いていました。ほかの学年では、教師に反発する生徒もいましたが、35期生にはそうした問題は見られませんでした」（森下先生）

大学入試においても、目覚ましい実績を上げた。例年2、3人だった国公立大学合格者が、35期生では、推薦・AO入試も含めて6人になったのだ。

「35期生には、授業にしっかりと参加し、最後まで諦めない生徒が多かったです。授業後は生徒が自ら黒板を消すなど、それまでにない姿も見られました。学習に向かう姿勢が身についたことが、入試の好成績につながったのだと思います」（弥田先生）

テスト結果を詳細に分析し、 生徒の学習意欲向上につなげる

BSにより生徒は変わったが、生徒個々の課題は把握しきれていなかった。そこで、13年度の1年生からベネッセの「基礎力診断テスト」（*1）を活用し、特にGTZ（*2）のD3の生徒のつまづきには、個別に対応している。進路指導部副部長の恩塚寛先生は、次のように述べる。

「それまでも、1・2年生は年2回、3年生は1回、『基礎力診断テスト』を受験していましたが、担任が生徒に帳票を返すのみでした。そこで、教務部主導でテスト結果を分析し、BSの成果を検証すると同時に、生徒一人ひとりがどこを苦手としているのかを把握し、今後の指導に生かすようにしました。先生方には、成績下位層の学力の底上げを意識してほしいと伝えました」

活用方法は次の通りだ。テスト結果を教務部が教科ごとに分析してプリントにまとめ、学年集会で生徒に配布して説明する。特に、1年生第1回では、「基礎力診断テスト」やGTZについて説明し、D3では希望進路の実現が厳しいことを強調して、生徒に「基礎力診断テスト」の重要性を認識させる。

また、次のテストに向けて、授業の受け方、長期休業中の過ごし方、付属教材「One We e e k トライアル」の活用方法なども示す。

学年集会後には、2日間かけて、LHRで生徒一人ひとりと面談を行い、帳票を返ししながら結果の総括、学習のアドバイスなどを行う。D3からの脱却を果たした生徒の中には、うれしさのあまり泣き出す生徒もいるという。面談の後、学年によって任意に保護者会を開き、テスト結果や今後の指導方針・内容の説明も行う。

「基礎力講習」の実施で D3ゾーンの生徒ゼロを目指す

次の「基礎力診断テスト」までの1〜2か月間には、D3の生徒を対象とした「基礎力講習」を実施する。ただ、1年生第1回の後は、結果がD3以下でも参加は任意とした。「基礎力講習」は、進路選択の幅を広げるチャンスと認識させた上で、主体的な参加を重視しているからだ。教務部副部長の諸橋征爾先生は強調する。

「第1回はテストの重要性を生徒はあまり理解していない状態で受けるので、D3でも講習を強制しません。D3のままでは卒業後の進路がおぼつかないという現実を伝えて、講習を受けずに自分の力で頑張ると言うならやらせてみる。その上で、第2回のテストでもD3のままであれば、講習に必ず参加するように指導しています」

「基礎力講習」は、放課後に各教科4〜8回実施する。1回50分で、BSと同様に、各教科

の教師が作成した独自プリントに取り組み。BSと異なるのは、できるところまで自力で解答し、分からない場合は教師に質問しに行く点だ。指導は、学年団がチーム・ティーチングで行う。原則1人は教科担当が入るようにしているが、教科外の教師が担当する場合もある。当時教務部でプログラムを立案した阿部義之先生はこう語る。

「D3からの脱出を目的とした講習ですから、おのずと学習内容は小・中学校段階のものとなります。そのため、担当教科を問わずに指導できます。生徒の質問に答える形式の講習なので、生徒と教師の距離が近くなるのもメリットの1つです。講習を通して関係性が深まると、通常の授業や日常生活においても、質問や相談をしてくるようになります」

「基礎力診断テスト」の分析を通してBSの効果も確認できた。BSを行っていない学年は、決まって1年生第2回以降の偏差値が下がっていたのに対して、3年間BSに取り組んだ35期生の場合、偏差値は3年生まで1度も下がることなく上昇し続け、D3の生徒が激減した。

『基礎力診断テスト』は、学力と同時に、生徒の学習意欲を数値化したものでもあります。授業へ向かう姿勢がよくなれば、おのずと成績も上がり、それによってさらに生徒の意欲が上がり、もっと頑張ろうという雰囲気

が醸成されていくのです」（諸橋先生）

学校が一丸となり、さらなる学力向上を目指す

16年度、BSが2年生でも1単位の学校設定科目として設けられた。35期生の躍進や成績推移を通して、継続実施が望ましいと判断したのだ。プリントは、国語ならば、1年生では漢字練習だが、2年生では慣用句など、1年生より発展的な内容になる。通常授業の復習となるような内容を盛り込み、定着を図る教科もある。また、3年生でも、数年前から学年の発案により月1〜2回、LHRを使って書写と就職対策プリントに取り組み「キャリアステディ(CS)」が始まっていたが、それも継続していく方針だ。

国公立大学を目指す生徒が増えたのも、大きな成果だ。15年度卒業生の中には、第1志望を目指して浪人する生徒も出た。強い意志を持って学習を継続する生徒が現れたことを、教師は好ましく受け止めている。

「現在、学校に自習室をつくる計画を進めています。静かに学習に向かう環境を提供することで、学びに向かう雰囲気をさらに醸成していきたいと思っています。その上で、今後の目標として、成績下位層ではDゾーンの生徒ゼロ、上位層では国公立大学2桁合格を掲げています。決して容易なことではありませんが、学校が一丸となって取り組みれば必ず達成できると信じています」（恩塚先生）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

基本的な方針を示したことで スムーズに進んだ新しい取り組み

生徒会部 阿部義之

本校に5年前に赴任し、2015年度まで教務部に籍を置きました。「基礎力講習」の計画立案を任せられたのは2年目のことです。『基礎力診断テスト』を学力向上のために活用したい」という恩塚先生の提案を受け、生徒の実態に合わせて、どのように進めていくのかを形にしました。

当初、「基礎力診断テスト」を軸にした講習を行うことだけが決まっていました。1年生の国語と英語の先生に、どの教科の先生が入っても指導できる教材の作成をお願いし、数学は私自身が作成しました。学年集会や面談、講習期間のスケジュールは、テスト結果が返却される時期から逆算して組み立てました。それらの案をたたき台に、教務部や当時の1学年団に相談をし、意見を聞きながらプログラムを作りました。

学校全体で講習を行うことを説明すると驚く先生もいましたが、生徒のためになることなら労を惜みず協力してもらえるのが本校のよいところです。進め方を各学年に任せていたら、取り組みに差が出たかもしれませんが、教務部主導で基本的な方針を示したことで、取り組みがスムーズに進んだのだと思います。

今、本校は変革の過渡期にあります。本年度から2年生でもBSが始まり、私自身も担当教科の課題が見えてきました。できるならあと数年は本校にいて、変革にかかわり、変わりゆく生徒の姿、学校の姿を見届けたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2015年6月号指導変革の軌跡「[石川県立金沢北陵高校](#)」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



神奈川県立
川和高校

学校改革

教師個々の実践が 徐々に浸透し、 変革が進む学校に

◎校訓は「誠実・勤勉・質朴」。2010年度から6年間、神奈川県「学力向上進学重点校」、16年度は「学力向上進学重点校エントリー校」の指定を受ける。文武両道の具現化を目指しており、全国大会や関東大会への出場が常連という部活動も多い。

設立

1962(昭和37)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約320人

2016年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、北海道大、東北大、東京大、東京外国語大、東京工業大、横浜国立大などに74人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ1002人が合格。

住所

〒224-0057
神奈川県横浜市都筑区川和町2226-1

電話

045-941-2436

Web Site

<http://www.kawawa-h.pen-kanagawa.ed.jp>

変革のステップ

背景

◎教師が現状に満足しており、生徒の能力を伸ばし切れていなかった。大学入試に向けた学習も生徒の主体性に任せていた

STEP 1

実践

◎教師個々の実践を徐々に浸透させる形で、授業や進路指導を見直す。また、部活動を通して、生徒と教師、生徒同士の信頼関係を構築

STEP 2

成果

◎授業改善が進むとともに、生徒と教師が一体となって受験に向かう雰囲気が整い、国公立大学合格者数も大幅に増加

STEP 3

現状に満足して、
課題意識が希薄なことが課題

神奈川県立川和高校は、ここ数年で進学実績が大幅に伸び、2015年度入試で初めて現役の国公立大学合格者数が70人を突破した。5年前のほぼ2倍だ。躍進の大きな要因は、10年度に神奈川県「学力向上進学重点校」の指定を受け、授業や進路指導のあり方を見直したことにある。進路支援グループ総括の榎本一弘先生は、改革前の課題を次のように振り返る。

「本校では、伝統ある進学校としての指導が確立されており、生徒や教師たちにそれ以上を求める雰囲気がありませんでした。学校全体として、特に課題を感じていなかったことが課題だったといえます」

大学入試に向けた学習についても、生徒の主体性に任せるといふ文化があり、そのため、生徒も学校を積極的に頼ることが少なかった。

「2年生の頃から、志望学部受験には必要のない科目の授業中に、他科目の学習をする生徒が出てきていました。そういった生徒は少数でしたが、学級全体の集中力が低下するなどの悪影響を及ぼしていたと思います」
(榎本先生)

生徒の高い能力を十分に伸ばし切れていないことに課題を感じて、指導を工夫する教師もいたが、あくまでも個人の取り組みにとどまっ

いた。それが、「学力向上進学重点校」の指定をきっかけとして、徐々に教師間で方針や意識の共有が図られていき、学校全体の取り組みに発展していった。

教師個々でできることに取り組み、自然な形で校内に浸透させていく

同校は、「学力向上進学重点校」の指定を2期6年間受けたが、一貫して「無理をし過ぎない」改革に取り組んできた。平容久副校長は、次のように説明する。

「無理をし過ぎると必ず反動が生じ、教師や生徒が疲弊するなどの弊害が出やすくなります。そのため、最初から学校全体で一斉に

始めるのではなく、まずは気がついた教師から実践し、その取り組みがじわじわと全校に浸透していったのだと思います」

授業改善では、目指す授業の型を定めるのではなく、「もつと生徒のニーズに応え、生徒の脳が活性化する深い学びのある授業づくりをする」といった方針だけを示し、教師一人ひとりができることに取り組んだ。

「学校としては、大きな方針を示すにとどめました。それだけに、教師の主体性が問われましたが、一気に頑張り過ぎずに進められたことが、継続的な改革につながり、とてもよかったです」（榎本先生）

授業改善の方法は教師個々に任せる一方で、担当教科以外の授業見学を促したり、外部講師によるアクティブ・ラーニングに関する研修を実施したりと、授業改善につながる材料は提供した。それらが、外部から情報収集をしたり、ほかの教師のよい指導を取り入れたりする動きにつながった。例えば、数学科や英語科の教師が授業でアクティブ・ラーニングを行うと、それを参考に、他教科でも授業に取り入れるという自然な動きが見られるようになった。

以前は、教師個々で作成していた定期考査の問題を、各教科で学年共通としたのも、指導の方向性をそろえるのがねらいだ。国語科の三好純代先生は次のように語る。

「定期考査の問題は、その学年を担当する



平容久 たいら・やすひさ
神奈川県立川和高校副校長
教職歴32年。同校に赴任して2年目。「努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る」



榎本一弘 えのもと・かずひろ
神奈川県立川和高校
教職歴32年。同校に赴任して8年目。学力向上進学重点委員長。進路支援グループ総括。「諦めたら、そこで試合終了」



三好純代 みよし・すみよ
神奈川県立川和高校
教職歴7年。同校に赴任して2年目。進路支援グループ。「主役は生徒、教師はサポーター」

教師が集まり、かなりの時間をかけて作成しています。定期考査を共通のものにしたことで、おのずと授業のレベルや進度などを共有するようになりました」

例えば、英語の定期考査は、学年共通で初見の英文を用いた問題を作成している。授業で初見の英文を読む力をしっかり育まないと、学級間で平均点に差が出てしまう。そのため、教師間で授業のポイントを共有し合うようになり、それが指導力の向上にもつながっている。

『学力向上進学重点校』の指定を受けて、教師間で指導や評価を共有することに努めてきました。他教科のよい取り組みを、自教科でも取り入れるなど、教科間でも切磋琢磨しています」（平副校長）

夏季講習や受験直前期の指導を見直し、学習に集中できる環境に

一部の教師が個人的に行っていた夏季講習の充実も図った。これも、全校一斉の取り組みではなく、各教科で推進し、その効果を見ながら年度を追って徐々に拡充してきた。09年度では3年生は8講座、1・2年生は2講座だったが、16年度はそれぞれ16講座、17講座を実施した。

「本校では、夏休みも、生徒・教員ともに部活動に熱心に取り組めます。部活動と学習の両立を考慮して、今後も無理のない範囲で

継続したいと考えています」(榎本先生)

受験直前期の指導も見直した。以前は、1月のセンター試験直前になると、3年生の生徒は自宅で学習を始めるようになり、登校してくる生徒の人数が少ない日もあった。

そこで、理系のクラスであれば、センター試験対策として国語や地歴・公民の学習の追い込みの時期となる1月前半にそれらの授業を実施し、数学や理科の授業を1月後半にずらすという時間割の組み替えを行った。さらに、体を動かして心身ともに気分転換ができるよう、通常週3時間の体育の授業を少しでも増やすようにした。すると、授業に出席する生徒が増え、12年度には32%だった1月の欠席率は、13年度には4%に激減した。

「生徒が教室に集まれば、自然と一緒に学習する雰囲気になります。生徒同士が教え合ったり、励まし合ったりすることは、自宅などで1人で机に向かうことでは得られない効果があることに気づくようです」(榎本先生)

部活動を通して信頼関係を構築し、受験に向かう一体感を醸成

同校では、以前は多くの生徒が個々の力で受験に向かっていたが、「学力向上進学重点校」の指定後は「高校からは団体戦」「チーム川和で受験を戦う」といった方針を強調し、生徒の

意識づけや校内の雰囲気づくりに努めている。

その土台となるのが、部活動だ。生徒の部活動加入率は95%を超え、全国的に活躍する部活動も多い。そのため、1・2年生では部活動に全力を注ぎ、3年生の引退後に大学入試対策に取り組み始めるという生徒も多かった。現在は文武両道を旗印に、入学後から学習と部活動を両立する大切さを何度も説明している。

「1年生からしっかりと授業を受けていれば、引退まで部活動に集中しても、大学入試を乗り越えられると強調することで、生徒は安心して部活動に取り組めます。そして、部活動を通して培われる最後までやり抜く力や仲間を尊重して協力する力が、学習に生かされるという好循環が生まれています」(平副校長)

部活動に熱心に取り組むことで、生徒同士、生徒と教師の信頼関係も築かれている。

「赴任当初は、生徒があまりに熱心に部活動に打ち込む姿に驚き、心配するほどでした。しかし次第に、部活動は本校の教育活動の土台となっていることに気づきました。生徒は教師を信頼して、授業中も集中して話を聞いていますし、学習や進路の相談もしています。また、卒業生や上級生が、自らの経験を踏まえた学習や進路に関するアドバイスをする姿も、日常的に見られます」(三好先生)

同じ部活動の生徒はもちろん、異なる部活動に所属する生徒同士でも互いの活動を尊敬し、

刺激し合っている。そうした関係は、授業中や放課後の自主学習などの場での自然な学び合いにもつながっている。

学習と部活動の両面で校内が一体となる指導を強めるにつれて、生徒は教師を積極的に頼るようになり、放課後に質問に訪れる生徒が増えた。塾や予備校で出された問題について質問されることもあるが、教師はそうした質問にも丁寧に答える。必要に応じて塾や予備校とも連絡を取り合って、指導に生かしている。

継続的な模試で学力を把握し、自信を持って受験に向かう生徒たち

生徒が目標を持って授業に向かえるように、有効活用しているのが模試だ。以前から各学年で模試を実施していたが、学年によって模試の種類が異なり、学力の推移を把握しづらかった。そこで、11年度、全学年ですべての模試をベネッセの進研模試に統一。例えば、1年生では、7月、11月、1月に進研模試を行い、生徒自身が前回からの学力推移を客観的なデータで把握できるように環境を整えた。その結果、生徒は自分の学力の伸びを見通せるようになり、進路目標を具体的に持てるようになったという。また、模試は、教師の指導の後押しにもなっている。

「毎年同じ指標で見えていくことで、部活動に一生懸命に取り組んできた生徒は、3年生

秋の模試の結果がよくなくても本番では合格するケースが多いことを客観的なデータとして確認できるため、生徒に学習と部活動の両立の大切さについて説明する材料となっています」(榎本先生)

生徒の意識と行動の変化を受け、 教師の改革意識が高まる

生徒の中に学校や授業を大切にする意識が高まったことは、様々な好ましい変化をもたらしている。1年生からすべての授業を真剣に受けるようになり、苦手科目だからと低学年から学習を諦めてしまう生徒も少なくなった。そして、学校としてセンター試験への出願を推奨する方針も相まって、16年度に初めてセンター試験出願率が100%となった。それに比例して、5教科7科目受験率も高まり、14年度には27%だったのが、16年度には43%へと大きく伸びた。

こうした生徒の意識と行動の変化は、国公立大学合格者が急増した主要因に挙げられるだろう。しかも、16年度入試では3人が東京大に合格するなど、難関大学合格者数も増えている。生徒の変容は、教師をさらなる指導改善へと向かわせている。

「改革当初は、『今の指導で十分』と考えていた教師も、生徒の変化に刺激を受けて、次第によりよい授業にしようと自ら工夫してく

れるようになりました。強引に引き込まなかったことが、自然な形で学校全体の取り組みになったと思います」(榎本先生)

こうして培ってきた学校文化としての教師の一体感を、今後いかにして引き継いでいくか。そこには、管理職の役割が欠かせないと、平副校長は語る。

「本校は、校長のリーダーシップの下、個々の教師の主體的な取り組みにより改革を進めてきました。管理職は場・雰囲気構築する

こと、常にアンテナを高く張り、生徒や教師の実態に敏感でいることが大切だと考えています。それは、進学実績などの学力や進路にかかわることだけではありません。例えば、部活動の実績が落ちてくると、学習と部活動の両立による相乗効果も崩れてしまう恐れがあります。これからも、先生方の努力で培ってきた学校文化をきちんと受け継いでいるか、そこで生徒が十分に伸びているかをしっかり見定めていきたいと思っています」

若手教師が語る、指導変革への情熱

温故知新をモットーに チャレンジ精神を持ち続ける

進路支援グループ 三好純代

本校の生徒は、真面目で一生懸命というのが第一印象です。そして、教師の投げかけには非常によい反応があります。赴任当時は自分に何ができるだろうかと悩みましたが、これまでの経験でよいと感じたことをすべて試そうという気持ちで臨んできました。

その1つが、生徒に情報を発信するための「進路掲示板」の設置です。模試の過去問を置くスペースを作り、生徒が自由に持ち帰ってよいことにしました。担任の先生から生徒に周知してもらったところ、多くの生徒が利用するようになり、他教科の先生方も徐々に問題プリントなどを置くようになりました。このように、本校には1人の教師の取り組みが、校内に徐々に広がっていく文化があります。特に、ベテラン教師が若手教師と一緒に取り組んでくれる姿には勇気づけられます。

生徒の学習意識が高いので、その期待に応えるためにによりよい教育を提供したいという思いが、先生方の根底にあります。そのため、授業見学などを率先して行い、新しいことにチャレンジしていこうという先生方もたくさんいます。また、外部の研修などへの参加も積極的に後押ししてもらっています。こうした学校文化を受け継ぎ、「温故知新」をモットーに、いつまでもチャレンジ精神を持ち続けたいと思います。

写真 進路関連の情報を提供する「進路掲示板」。受験情報を発信したり、過去問題を置いたりして活用している。



今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年8月号指導変革の軌跡「埼玉県立川口北高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

ビフォー アフター

検討会メンバー



大分県立
中津南高校
遠藤源治
えんどう・げんじ

教職歴15年。同校に赴任して4年目。3学年担任。進路指導部副主任。理科。「なぜば成る」をモットーに夢に向かって挑戦し続けるタフな生徒を育てたい」



群馬県立
下仁田高校
高橋真人
たかはし・まさと

教職歴14年。同校に赴任して8年目。教務主任。数学科。「物事に謙虚に、楽しく取り組む大切さを、自らの姿を通して生徒に教えたい」



富山県・私立
片山学園中学校・高校
森内梨絵
もりうち・りえ

教職歴7年。同校に赴任して8年目。進路指導部長。国語科。「目の前の生徒は日本の未来。教師はその可能性を開き、養い育むことが仕事です」

3年生0学期

学習計画・記録表

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、2年生3学期、いわゆる「3年生0学期」の学習スタイルの確立を目指した「学習計画・記録表」について検討する。

検討

受験生への切り替えに向けて、 学習スタイルを検証する機会に



遠藤 3年生0学期になると、受験への意識が高まってくるのと同じ

時に、やるべきことの多さに困惑し、勉強への意欲を失いそうになる生徒も出てきます。特に、塾に通う生徒の中には、学校の課題に塾の勉強が上乗せされ、1日の学習量が膨大になってしまふ者もいます。そうした生徒が、やらなければいけない学習を列挙すると、実現性のある計画はならないのが現状です。



森内 3年生0学期のテーマは、やらされ感からの脱却だと私は思

います。「その課題がどんな力の育成につながるのかを考えながら取り組もう」と、この時期の生徒には話しています。受け身の学習のままだと、勉強時間を増やしさえすれば力がつくと思われ、効率的な学習に結びつきません。成績中・下位層の生徒の中には計画倒れになる生徒もいますが、**3年生0学期はまだ失敗してもよい期間ですから、失敗や成功を繰り返しながら、学習の進め方を見つめ直す機会にしてほしいですね。**

遠藤 成績上位層の生徒は、こうした計画・記録表を書かなくても学習

のリズムができていますから、成績中・下位層の生徒を念頭に置き、**自分の学習の軸をつくらせることを大きな目的とした方がよさそうです。**

森内 実際、成績上位層の生徒は、「数学の問題は1日3題」「英語は1日長文を1つ」など、学習の軸を持つ生徒が多いですね。だから、やらされ感が少ないのでしょうか。



高橋 3年生0学期は、これまでの生活リズムを振り返りながら今後を見据える時期だと考えています。ほとんどの生徒が就職を希望する本校においても、生活リズムや時間の使い方について見直すよい期間です。就職すると、毎日始業時にその日にすることを挙げ、達成度をチェックする職場も少なくありません。

大分県立中津南高校 遠藤源治先生 3年生0学期「学習計画・記録表」

次に、曜日ごとに学習する科目・内容（予習、小テスト、復習など）を決め、1週間の学習計画を立てる。いったん担任が回収し、コピーして返却。生徒は自宅の机の前に貼り、実際に学習した時間を記録する。

ねらいと機能

すべきことを把握し、
1週間単位で学習内容を考えさせる

3年生0学期に、遠藤先生は生徒に学習計画・記録表を作成させている。これは、学習計画表で教科・科目の優先順位を整理した後、生活時間割で1週間単位でいつ、何を、どれだけ勉強するのかを考えるものだ。3年生になる前に、日頃の学習内容を整理することで、焦ることなく受験態勢に切り替えていくことをねらいにしている。

まず、生徒はこの「1月～学習計画表」を記入し、得意・不得意や過去の模試の成績などを踏まえて、3年生0学期に取り組む内容を教科ごとに整理する。予習・復習や課題といった普段の学習と、苦手克服や得意伸長のための+αの学習の2つの視点で考える。

課題と解決策

3 2 1

- 1 学習量の多さに生徒が意気消沈しないように、「特に取り組むべきこと」の優先順位を明確にさせる。
- 2 時間の使い方など、学習の進め方を見直せる機能を盛り込む。
- 3 自分が立てた計画をクリアした達成感を味わえるようにする。

ん。企業の採用担当者からも「時間を管理したり、優先順位を判断したりする力はとても大切」とよく聞きます。隙間時間の活用など、時間を上手に使う力をつけさせたいです。

遠藤 指示されたまま、すべてに満遍なく取り組もうとすると、生徒はパンクしてしまうかもしれません。教科バランスを考えさせながらも、今何をすべきか、優先順位を明確にすることが重要だと感じました。

高橋 学習量の多さにくじけることなく、勉強へのモチベーションを維持できるような教師のサポートも大切です。教師が生徒一人ひとりの成功や失敗を見守り、少しずつ達成感を持てるシートにする工夫や配慮が必要です。

学校プロフィール

大分県立中津南高校

◎全日制／普通科／共学／1学年約200人
◎2016年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、東京大、京都大、九州大、大分大などに124人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ247人が合格。

群馬県立下仁田高校

◎全日制／普通科／共学／1学年約60人
◎2年次からアドバンスコース、ビジネスコース、カルチャーコースの3コースに分かれる
◎2016年度進路実績（現役のみ）／4年制大・短大進学2人、専門学校進学14人、就職32人。

富山県・私立片山学園中学校・高校

◎全日制／普通科／共学／1学年約100人
◎2016年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東北大、東京大、富山大、名古屋大、大阪大などに56人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ299人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ
「学習計画・記録表」を改良！
次ページで紹介します。

アフター

学習計画・記録表

2年 組 番 氏名

12月11日～12月17日

この期間の
重要イベント 3年生を送る会ミーティング生徒にあらかじめ、その週の主なイベントなどを書き込ませる。
事前に予定を見通すことで、学習時間の確保がしやすくなる。

学習内容の記録

学習時間の記録

曜日	力を入れたい教科・科目			やれたらよい教科・科目		
	英語					
日	☐ 予習	☐	☐	☐	☐	☐
	☐ 長文1ページ	☐	☐	☐	☐	☐
	☐ 模試見直し	☐	☐	☐	☐	☐
月	目標 120分	目標 分	目標 分	目標 分	目標 分	目標 分
	結果 分	結果 分	結果 分	結果 分	結果 分	結果 分
	☐	☐	☐	☐	☐	☐
土	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	☐	☐	☐	☐	☐	☐
合計	目標 分	目標 分	目標 分	目標 分	目標 分	目標 分
	結果 分	結果 分	結果 分	結果 分	結果 分	結果 分
	☐	☐	☐	☐	☐	☐

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	1	2	3	4	5	6	7
7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	1	2	3	4	5	6	7

左側には、力を入れたい教科・科目を軸に、すべきことを箇条書きにして（to do リスト）、目標とする学習時間を1週間分記入。教師は、生徒個々を書いたベースとなる記録表を数週間分コピーし、生徒に渡す。生徒は、すべきことができたなら□にチェックを入れ、実際に学習した時間を結果の欄に記録する。また、日によって学習内容が変わる場合があるため、適宜、修正・見直しをさせる。

右側には、1日の記録をつける。あらかじめ勉強ができない時間帯（すべきことが決まっている時間帯）に斜線を引いておく。生徒は1日を振り返って、自由に使える時間帯で勉強ができた時には、その時間帯を赤ペンなどで塗り潰していく。まず、自由に使える時間を可視化させるのは、1日の中で勉強時間を確保していく習慣を身につけさせるためだ。

「左側には、力を入れたい教科・科目を軸に、すべきことを箇条書きにして（to do リスト）、目標とする学習時間を1週間分記入。教師は、生徒個々を書いたベースとなる記録表を数週間分コピーし、生徒に渡す。生徒は、すべきことができたなら□にチェックを入れ、実際に学習した時間を結果の欄に記録する。また、日によって学習内容が変わる場合があるため、適宜、修正・見直しをさせる。」

右側には、1日の記録をつける。あらかじめ勉強ができない時間帯（すべきことが決まっている時間帯）に斜線を引いておく。生徒は1日を振り返って、自由に使える時間帯で勉強ができた時には、その時間帯を赤ペンなどで塗り潰していく。まず、自由に使える時間を可視化させるのは、1日の中で勉強時間を確保していく習慣を身につけさせるためだ。

2つに分かれていた学習計画表と記録表を1つにまとめ、記入する生徒の負担を軽減。また、「力を入れたい教科・科目」を生徒に挙げさせ、それについてまず学習計画を立てさせるようにした。1週間の計画を立て、実際に学習した内容をチェックし、学習にかかった時間を記入させる。それらを数週間分蓄積・保存していくことで、面談の資料としても活用することができる。

学習計画表と記録表を
一体化させてより機能的に

改訂後のねらいと機能



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

活用

優先すべきことを明確にし、軸のある学習スタイルを確立させる



遠藤 力を入れたい教科がどれなのか、実際にどのくらい勉強できているのかを常に意識できる学習計画・記録表へと改訂したいですね。



森内 時間の使い方、学習への取り組み方に課題を持つ生徒が少なくないのであれば、学習計画・記録表を使って、3年生4月になる前に、生徒に自分の課題を見つけさせたいです。大きく飛躍するために、特に力を入れたい教科とそれ以外の教科に大別すると、計画倒れやすることの多さによる勉強へのモチベーション低下を防ぐことができるでしょう。「計画通り進めることは大切だけれど、自分に合っていないと判断したら、適宜、修正・変更していこう」と説明することも大切です。



高橋 自分が立てた計画の修正や変更は決して悪いことではないと生徒に周知した上で、達成したこと

は自分でも一目で分かるようにしたいです。例えば、学習時間は目標と結果の2つの欄を設けてはどうでしょうか。また、生活時間割に1日ずつ、勉強した時間帯を記録していくことも、1日の使い方を検証する意味では効果的だと思います。計画は立てたら終わりではなく、見直し、修正することが重要だということ、計画を修正する力は社会人になった時に必要だということを伝えたいです。

遠藤 すべきことをto doリストのように挙げておき、できたところにチェックを入れていけば、達成感を得やすくなりそうです。また、学習計画・記録表の記入への負担感を減らすために、生徒が計画したものは、あらかじめ数週間分を教師が複写し、まとめて渡しておくようにしたいです。生徒はそれらに記録していき、記



活用の流れ

1

生徒に、ベースとなる1週間の学習計画・生活時間を記入させる。

2

教師は、生徒個々が作成した計画・記録表を数週間分コピーし、渡す。

3

生徒は、実施したことや学習した時間を記入していく。

4

教師は、記入された用紙を基に、面談や声かけを行う。

録が済んだ記録表は冊子のように保存させるとよいでしょう。また、平日にあまり勉強せず、土日のために込んでしまうことがないように、1週間のイベントを見通した上で、計画と記録を日曜日から書き始めさせたいです。「この週は行事で忙しいので、日曜日にたくさん勉強しておこう」といったように、時間管理の指導がしやすくなると思います。

高橋 生徒に記録させたものは、私たちも面談などの資料として活用したいですね。生徒が掲げた目標を少しでもクリアできている時は、しっかり褒めてあげたいです。教師に見てもらっているという安心感は、モ

チベーションの維持につながります。

森内 そうですね。その上で、自分の軸に従って1週間を過ごせるようになれば、たとえ少々計画通りにいかないことがあっても、自分なりのやりがいを感じられるのではないのでしょうか。教師の手が徐々に離れていっても、自信を持って学習に臨めるようになるはずです。

遠藤 力を入れたい教科・科目への取り組みを、生徒も担任もきちんと把握することができるようになったと思います。面談などでは、双方から取り組みの進捗がスムーズに話題に上がるとよいですね。

グローバル化と地方創生を 一体的に捉えた教育で、 地域の課題解決を図る人材を育む

（ 福井大学 ● 国際地域学部 ）

2016年4月、福井大学に新設された国際地域学部は、国際と地域を別々のものではなく一体として捉えて、地方創生を担う人材の育成を目指している。その教育を実現するために、学内の資源を有効に取り入れたカリキュラムを構築。世界と地域をつなぐための英語4技能の育成、企業・自治体などと連携して行うプロジェクト型の演習科目、そして、課題に複合的にアプローチするための文理融合型教育と、学生が「国際」と「地域」の両面を深く学べる場を設けている。

国際と地域の両方に比重を置いて学ぶ

「グローバル化」と「地方創生」――

この両者は一見、相反するもののように見えるが、実は切り離しがたく結びついていて、経済の活性化、環境問題、多文化共生など、グローバル化した社会が抱える課題の多くは、地域・国内・国際という異なるレベルであっても共通し、相互にかかわりながら展開している。

このように、国際と地域を一体的に捉えて、地域の諸問題の解決を担う人材の育成を目指しているのが、2016年4月、福井大学に新設された国際地域学部だ。国際地域学部長の寺岡英男副学長は、学部新設のねらいを次のように説明する。

「福井県は、ものづくりが盛んで、中小企業の多い地域です。古くはオイルショック、近年ではリーマン・ショックの際には、県内の経済も大打撃を受けました。しかし、各企業は、新素材の開発や販売経路の開拓などに努め、海外にも進出し、今や世界シェア1位の商品も数多くあります。地方創生において、グローバルな視



福井大学副学長（国際担当）
国際地域学部長
寺岡英男 てらおか・ひでお

福井大学理事（教育・学生）等を経て現職。専門は教育方法学。



福井大学
国際地域学部教授
伊藤 勇 いとう・いさむ
福井大学教育学部教授等を経て現職。専門は社会学。

点は欠かせず、それは経済に限ったことではありません。地域の抱える諸問題を構造的・重層的に捉えて、地域にとって最善の課題解決策とそれを担う人材育成を、国際水準の教育で実現することを目指しています」

同学部では、国際と地域の両方に比重を置いて学修と研究を進めるため、学生全員に海外留学レベルの英語力をつけさせることを目指している。また、企業や自治体などと連携して行うプロジェクト型の学習を、4年間を通して行うカリキュラムとした。さらに、学生が主体的に学びを進められるよう、地域創生の視点から学びに入る「地域創生アプローチ」と、グローバルな視点から学び

に入る「グローバルアプローチ」の2つのアプローチを用意し、学生が自身の関心に応じて科目を系統的に学べるようにした。国際地域学部の伊藤勇教授は次のように語る。

「教育目標の達成に向けて、学問の枠組みを超えたカリキュラムにしています。アプローチは2年次進級時に選択しますが、3年次以降での変更を妨げない柔軟なものです」

1年次前期に英語科目を集中、英語で学ぶ力を育成

同学部の学びの特徴を見ていこう。まず挙げたいのは、3年次に半年以上の海外留学を必修、または推奨とし（アプローチによって異なる）、それに向けた英語力をつけるために、1年次に英語の科目を集中して履修するカリキュラムとされていることだ。

福井大学では、11年に「語学センター」を設置し、TESSOL（＊1）を専門とした英語インストラクターによる少人数制の授業を行うカ

リキュラムを構築。遮音設備の整った個人の語学演習室を設置するなど、英語学習のための環境も充実させ、英語4技能をバランスよく育成するための英語教育改革を推進してきた。

同学部では、それらのノウハウを土台として、学部独自の英語教育を行っている。1年次前期の履修科目は、約6割が英語関連の科目となる（図1）。同学部では、2つのセメスター制と4つのクォーター制を併用しており、反復学習が重要となる英語関連の科目は、クォーター制として、短期に授業時数を多く設定して集中的に学べるようにした。国際地域学部1年の相原光貴さんは、1年生の前期を次のように振り返る。

「英語の授業が1日2～3コマある日が続く4日あり、さらに、1週間に

図1 1年次の履修科目例

前期		後期	
1クォーター	2クォーター	3クォーター	4クォーター
大学教育入門セミナー		国際地域概論	
情報処理基礎		統計入門	
英語Ⅰ	英語Ⅴ	English Reading	English Reading
英語Ⅱ	英語Ⅵ	English Writing	English Writing
英語Ⅲ	英語Ⅶ	法学概論	
英語Ⅳ	英語Ⅷ	政治学概論	
	TOEFL 対策講座	経済理論	
リサーチ入門		弁論法	
スピーキングⅠ		異文化コミュニケーション	
ジェンダー論		課題探求プロジェクト基礎A	課題探求プロジェクト基礎B

赤い網かけの箇所は英語、グレーの網かけの箇所は調査・統計に必要な科目を示す。1年生の前期は、履修科目の約6割が英語科目となり、集中的に英語を学ぶようにしている。

＊同大学の資料を基に編集部で作成



写真1 英語の授業は、英語教育のプロである英語インストラクターが担当。話す機会を多く設けて、コミュニケーション能力を高めていく。

2回は課題が出るなど、毎日、英語を学習していました」

どの科目も、学生の英語力によって3クラスに分かれ、授業は原則、ネイティブ・スピーカーが担当し、英語で進められる。国際地域学部1年の遠藤優海さんは、英語の授業は楽しいと話す。

「スピーキングの授業はもちろん、ライティングやリーディングの授業でも、英語でディスカッションする機会が多くあります。授業は活動中心で楽しく取り組みますし、スピー

キングの力が大学入学時に比べて格段に上がりました」

同学部では、英語力の目標を、1年次前期修了時にTOEFL480以上、後期修了時に500以上と設定し、最終的には留学資格のTOEFL530以上、目標550以上としている。

「1年生前期修了時に受験したTOEFLでは、大半の学生が前期の目標を達成していました。集中して英語を学ぶことは、大きな効果があったと捉えています」（寺岡副学長）



遠藤優海 えんどう・ゆうみ
グローバルアプローチ志望。宮城県宮城第一高校卒業。



相原光貴 あいはら・みつぎ
福井大学国際地域学部国際地域学科1年
地域創生アプローチ志望。三重県・私立海星高校卒業。

＊1 Teaching English to Speakers of Other Languagesの略。英語を母国語としない人に指導するために、第二言語習得理論、語彙・文法・発音などの教授法、カリキュラム、指導案、評価法などを学ぶ。

地元企業と連携し、 現実的課題と深く向き合う

2つめの特徴は、実際に地域の課題に取り組む専門教科目「課題探求プロジェクト」を、1年次から設けていることだ(図2)。これは、学生が県内の企業や自治体などに向いて、様々な課題を知り、調査し、課題解決の一端を提案するという実践的な授業となる。

「座学で学んだことを活用する場として、そして、学年が上がるにつれて到達目標も高くなるよう、プロジェクト学習を設定しています。課題の探求と問題解決を通して、意思決定力や批判的な思考を育むとともに、リアルな社会を理解し、自分の進路を考える機会にすることをねらいとしています」(寺岡副学長)

1年次3クオーターの「課題探求プロジェクト基礎A」を例に、授業内容を見ていこう。この科目では、鉄道、観光業、製造業などのテーマごとに学生5人で1チームとなり、1チーム2つの企業・団体を訪問し、社員・職員にインタビューを行う。遠藤さんは、人事がテーマのチームとなり、

図2 「課題探求プロジェクト」の概要

年次	科目名	授業概要
4年次	前期 課題探求プロジェクトⅢC	グローバルアプローチ(3年次後期に留学を終えた学生が対象): 留学中に各自の設定した探求課題を踏まえて、外国人との共生や地域資源の海外発信を地元コミュニティや自治体の観光関連部局に提案する。
	後期 課題探求プロジェクトⅢB	地域創生アプローチ: 前期の取り組みを踏まえて、各チームが調査や企画の実施、発案を行う。連携先の企業や自治体、住民とともにデータの分析、改善プランの検討などを行い、案をまとめて報告し、報告書を作成する。 グローバルアプローチ(3年次前期に留学を終えた学生が対象): 留学中に各自の設定した探求課題を踏まえて、外国人との共生や地域資源の海外発信を地元コミュニティや自治体の観光関連部局に提案する。
3年次	前期 課題探求プロジェクトⅢA	地域創生アプローチ: 連携先の企業や自治体などに課題解決の一助を提案するため、テーマごとにチームを組み、特定の課題について、必要な法規や情報、課題に関連する学問分野の文献学習、教員やゲストスピーカーのレクチャーから学び、予備調査や後期の調査・分析・発案の内容、日程を企画する。 グローバルアプローチ: 自治体の外国人担当部局や商工観光関連部局と連携し、具体的な事業や観光商品開発などについて改善提案を行う。
	後期 課題探求プロジェクトⅡ	地域創生アプローチ: 各自の問題意識の下に、具体的な課題や企業・自治体の特定の課題について、継続的な調査の実施や就業体験、イベント・活動への参加を通じた体験的な学習を行う。 グローバルアプローチ: 異文化交流やダイバーシティ(*1)に関連して自治体の生涯学習ないし商工観光などの部局や関係団体の実施するイベントや取り組みの企画・運営にチームで加わり、体験的な学習や調査を行う。
2年次	前期 課題探求プロジェクトⅠ	地域創生アプローチ: 地域社会や企業などで発生する問題について、教員の講義やゲストスピーカーの説明を受けて、グループディスカッションを行う。さらに、現場での活動体験や聞き取り調査をし、それらをまとめて報告する。 グローバルアプローチ: 異文化理解教育のあり方や地域の中での外国人問題、県内企業のグローバル展開などをテーマに、学校現場や自治体等への訪問・視察、イベント参加を行う。
	後期 課題探求プロジェクトⅠ	タイのグローバル人材育成を日本のそれと比較し、分析を行う。また、タイでの短期研修プログラムを通して、タイのグローバル人材育成の具体的な取り組みを体験し、学習する。
1年次	4クオーター 課題探求プロジェクト基礎B	他国・他文化における読み書きの慣習を学び、自らも様々な様式の読み書きを行う。その上で、3~4人のチームで、地域の小・中学生とともに物語の読み、語り、創作を日本語と英語で行う。英語の読み書き能力全般を向上させることを目的とした科目。
	3クオーター 課題探求プロジェクト基礎A	少人数のチームごとに、地域で生じている様々な課題を抱える現場や、企業・自治体等の具体的な現場を複数訪問。各チームは訪問先の事前調査、ヒアリング設計、事後分析を行い、報告会で学生自身の気づきや課題を洗い出す。

*1 多様性などの意味をもつ英語。

* 同大学の資料を基に編集部で作成

1社目の訪問先は建設資材などの販売を行う企業だった。質問内容は、メンバーで分担をして訪問先の業務内容や人事の仕事内容などについて調べてから、案を出し合い決めた。

「訪問先やテーマは決まっていたが、人事の仕事内容はあまり知らず、また、インターネットで調べて分かるようなことは聞けないため、質問内容を具体化するのは大変でし

た。でも、自分が就職活動をする際に、どのような観点で見られるのかを知ることができましたし、チームのメンバーから自分にはない視点での質問が出てきて、勉強になりました」

訪問先は全12チームですべて異なり、24社・団体が協力した。同大学では、1992年に地域共同研究センター(現・産学官連携本部)を、95年には県内企業による協力を設立し、

工学部を中心に産学官連携を進めている。協力会の会員企業は、200社以上(16年11月現在)。同学部は、こうした大学と企業、そして自治体等との連携実績を基に、30以上の企業・自治体等の協力を取りつけた。

「協力企業・自治体による協議会を結成し、学部運営に意見をいただくなど、協働して教育を推進していく体制を築きました。地域から本学部



写真2 課題解決策を考えるためには、まず課題を客観的に分析し、問題がどこにあるのかを把握することが重要になる。そのためのリサーチ・リテラシーを身につけるため、「統計学入門」などの専門科目も配置した。

への期待を感じています」(伊藤教授)

**解決策を見いだすために
自然科学の基礎も学ぶ**

既にある学内の資源を有効に取り入れ、文理融合型のカリキュラムとしていくのも特徴だ。寺岡副学長は次のように説明する。

「現代の地域社会が抱える問題は複合的であり、自然科学系の基礎知識と方法の助けを借り、その解決を目指して複合的、総合的にアプローチすることが必要です。本学部が研究対象とする地域の課題という観点から見た、自然科学系の基礎知識とリテラシーを培うという目的で、自然科学の専門科目を配置しました」

専門教育の「総合科学科目」は、地域の課題に密接にかかわる「生活環境」「科学技術」「医療」の3分野とし、「科学技術」は工学部、「医療」は医学部の専門教育科目から履修科目を設定した。また、課題解決に必須となるリサーチ・リテラシーも専門科目を配置した。

「ただ地域に飛び込むのではなく、

社会にどう貢献していくかを模索する場に

同学部の教育活動は始まったばかりだが、寺岡副学長は確かな手応えを感じている。初年度の入試では、出願者の半数以上が県外出身者だった。実際の入学生は2対1で県内出身の方が比率が高いが、県外出身の学生も多くいることで、学部内にはさらに活気がもたらされている。

「学部1期生ということもあり、どの学生も意識を高く持っています。特に県外出身の学生は、どの活動も率先して取り組んでいます。また、オープンキャンパスや高校教師対象の進学説明会では、他学部の3・4年生に交じって、本学部の1年生が堂々

地域が抱える課題を客観的に捉えられなければ、有効な解決策は見いだせません。論理的な裏づけがなければ、どんなによい解決策でも相手を納得させるのは難しいでしょう。社会調査の手法や統計学などを学ぶ科目を1・2年次に配置し、『課題探求プロジェクト』で実践できるようにしています」(伊藤教授)

とプレゼンテーションをしています。随時開催しているキャンパスツアーでは、国際地域学部の学生に案内された高校生や保護者からの評判が高く、学内からも本学部生への期待の声を聞いています」(寺岡副学長)

学生の積極的な姿勢は、学びにも表れている。遠藤さんは、大学の短期海外研修プログラムを利用して、1年生の夏休みに3週間、マレーシアのマラヤ大学での語学研修に参加した。毎日3時間の英語の授業のほかに、民族音楽や舞踊なども学び、最終日のセレモニーで発表した。

「現地の大学生がバディとしてつい

てくれて、観光案内もしてくれたので、ずっと英語を話していました。前期の授業でみっちり鍛えられていたので、英語で楽しくコミュニケーションできました」(遠藤さん)

英語を徹底的に学び、課題解決型学習を積んでいる学生は、将来をどのように見据えているのだろうか。

「発展途上国の教育に関心があり、それにかかわる仕事に就きたいと考えています。青年海外協力隊も視野に入れています」(遠藤さん)

「将来の職業は具体的に決まっていますが、この学部で英語を話せるようになり、経済や政治などの知識も身につけて、世界中、場所を問わずに働けるようになりたいと考えています」(相原さん)

そのような意欲に応え続ける学部でありたいと、伊藤教授は語る。

「一生取り組みたいテーマやその方向性を見つける場として、本学部は最適です。地域に出て、実際の課題に向き合い、それに真剣に取り組む人に出会い、たくさんさんの刺激を受けることでしょう。どのように社会に貢献していくか、自分の軸を模索できる学部でありたいと思います」

東京都

外国人との対話の機会を増やし、 生徒の自律的な英語学習と 国際感覚の涵養につなげる

東京都では、英語によるコミュニケーション能力の育成や国際感覚の涵養など、様々な視点で英語教育の改善を進めている。2016年度には、オンラインの英会話レッスンを都立高校22校に導入した。さらに、英語4技能を測る外部検定試験の受験費用負担など、多様な支援策を打ち出している。

東京都 Data

◎人口 約1364万6000人 ◎面積 約2,190.90km²
◎高校数 国立6校、都立186校、私立237校
◎高校生数 国立高校約3300人、都立高校約13万7000人、私立高校約17万6000人
◎電話 03-5321-1111 (代表)
◎URL <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/>

教育長の ビジョン

子どもが外国人と交流する機会を少しでも 増やす工夫と努力をこれからも続ける

東京都教育委員会 教育長 中井敬三

**英語を話す量の絶対的不足が
英語を話せない要因**

東京都は訪日外国人だけではなく、在住外国人も多い状況であり、4年後の東京オリンピック・パラリンピックを控え、グローバル化はさらに加速するでしょう。このように、グローバル化が進む社会で生きていく子どもたちは、日本にいたとしても、充実

した豊かな人生を送るために、英語力や国際感覚などの資質や能力を培う必要性がますます高まっています。

しかし、英語力に関して、特に話すことについて苦手意識を持つ日本人が多いと言われています。実際、国際的な英語力調査でも日本の平均点は、アジア各国の平均点に比べて低い水準にあります。文部科学省も、中学校、及び高校卒業段階で到達すべき目標

を示していますが、東京都を含め、全国的に目標には届いていません。

このようなあるべき姿と現状とのギャップが大きい要因の1つに、子どもたちの意識があると考えられます。例えば、以前に比べ、海外への留学人数が減っています。これは、日本経済の低迷によって家庭の経済的余裕がなくなっており、留学できないこと

自身が内向き志向であることが大きく影響していると捉えています。今後、外国の人たちと協働しながら仕事をする機会が国内においても増えていくことは、容易に予測できることです。そのような面からも、この内向き志向は大きな課題と言えます。

もう1つの要因は、英語の授業で生徒が発話する機会の少なさです。私が視察したいくつかの高校では、日本人教員とALTのチーム・ティーチングによるオール・イングリッシュでの授業が進められていました。ただ、授業中に1人の生徒が英語を発言する機会は、1回あるかどうかでした。

私は、理想的な英語学習は、ネイ



なかい・けいぞう 1978年、東京都庁に入庁。総務局理事、病院経営本部長、港湾局長、財務局長等を経て、2014年から現職。

ティブ・スピーカーと1対1の会話をするなど、濃密なコミュニケーションの時間を持つことだと考えます。しかし、学校という集団教育の場で、その理想的な環境をつくり出すことが難しいことも確かです。

ICTを活用した1対1の英会話レッスンを実現

解決策として、16年度、高校生を対象に始めた新規事業の1つが、ICTを活用して海外のネイティブ・スピーカーと1対1で行う英会話レッスンです。英語コミュニケーション能力の育成には海外留学が最も有効な方法の1つであると考え、都教委では

年間2000人の都立高校生を留学させています。ただ、約13万人いる都立高校生から見れば少数です。この英会話レッスンは、生徒が英語を話す機会を増やし、コスト面・人材面の課題もクリアできる方法だと捉えています。一方で、外国人留学生の受け入れを拡大する事業も進めています。学校に留学生が1人でもいれば、生徒が英語に触れる機会が増え、外国に関心を深めるなどの波及効果が高くなると期待しています。さらに、18年度中の開設を目指して、「英語村」の準備を進めています。この施設では、数多くの英語プログラムや外国人との交流の場を提供す

る予定です。対象は、小・中・高すべての学校段階、都内の公立・私立を問わず利用できるようにします。

英語村での体験が年に1回であっても、それは子どもたちの英語の学習意欲向上につながると考えています。また、グローバル人材には、英語力だけではなく、国際感覚の涵養や日本人としてのアイデンティティーの確立も重要です。英語村での外国人との交流が、それらの育成につながるものと期待しています。さらに、児童・生徒だけでなく教員も参加し、自身の指導を見直す機会の1つとしてもらいたいとも考えています。

都教委では、各事業の効果検証を行い、改善と工夫を重ね、今後も英語教育改革の様々な事業に取り組みしていきます。課題の1つは、小学校英語の教科化です。都教委の調査では、小学校教員の85%が指導面など何らかの不安を感じています。そのため、全国都道府県教育長協議会では、今年度、文部科学省に対し、小学校英語専科教員の配置に向けた要望書を提出しました。今後も国に働きかけるとともに、小学校への都教委独自の支援策も検討していきます。

「伸ばす教育」「支える教育」が公教育の使命

今後はより一層、新たな価値を創造する発想力と、それを実現していく推進力が求められるはずです。これから我が国は科学技術立国として、世界の国々と協調しながら発展を目指さなければなりません。だからこそ、子どもたちに未知なるものを探究する力やグローバルなコミュニケーション能力などを「伸ばす教育」を行っていく必要があります。

一方で、すべての子どもたちに、自立した人間として豊かな人生を築き、幸せに生きるための基盤となる力、すなわち基礎学力をしっかりとつける「支える教育」も大変に重要です。これには、人手も時間もかかりますが、公教育だからこそ担う役目です。

東京都だけでなく、全国各地で地域の歴史や特色を生かして様々な取り組みがなされています。その経験を互いに共有することが、日本全体の教育力を上げることにつながるのではないのでしょうか。全国との教育関係者と協働して、日本を支える子どもたちを育てていきたいと思っています。

会話中心の授業への転換、子どもの意識の涵養、 学習機会の拡大によって「使える英語力」を育む

3か月間の海外研修に 年間140人を派遣

東京都教育委員会では、2013年度に「東京都教育ビジョン（第3次）」を策定し、「国際社会で活躍できる人材の育成」に向けて様々な事業を進めている。その柱は、①使える英語力の育成、②豊かな国際感覚の醸成、③日本人としての自覚と誇りの涵養だ。中でも力を入れて推進している「使える英語力の育成」(図)について、指導部国際教育推進担当の瀧沢佳宏課長は次のように語る。

『「使える英語力」といった時に、日本人の弱点として指摘されるのはスピーキングであり、外国人と英語で十分な意思疎通ができないという人が大半です。この状況を変えるため、他者と英語でコミュニケーションができ、時には英語で主張や説得ができる力が身につく英語教育へ改

善する事業を展開しています」

主要事業の1つが、「東京グローバル10」と「英語教育推進校」だ。「東京グローバル10」は、次代を担うグローバル人材育成の取り組みを支援する事業で、都教委が10校の都立高校・中等教育学校を選定した。この10校は、以前から英語教育の改善に積極的に取り組み、国際交流事業を展開してきた学校だ。その取り組みを支援し、10校の成果を都立高校全体に広めていく。一方、「英語教育推進校」は、英語教育に特化して取り組む学校を支援する事業で、40校の都立高校・中等教育学校を指定した。

英語の授業の根本的な変革に向けた事業には、中学校・高校英語科教員の海外派遣研修がある。これは、年間140人を英語圏の国に約3か月間派遣し、現地の大学で英語教授法のTESOL(*1)などを学ぶというもの。自身の指導力向上はもち

ろん、受講者は学んだ指導法を帰国後に校内や地区に広める役割も担う。「帰国後は、いかに生徒が楽しく英語での活動に取り組むように働きかけられるかという発想で指導計画をつくるようになり、授業が激変します。また、習熟度が低い生徒たちで

あっても、すべて英語で授業ができるという自信を持つようになります。何よりも、あらゆることについて『現状をそのまま繰り返してはいけない』という意識を持ち、学校経営全体に積極的にかかわるなど、多くの面でプラスに働いています」(瀧沢課長)

国内の教員研修では、外国語活動・英語科の講座を増やした。ALTとチーム・ティーチングを行うための講座やTESOLを用いた授業の講座など、他事業と連動した内容や、教員の英語力自体を高めるための資

図 東京都「使える英語力の育成」に関する主な事業

- ・ **JET-ALT (*2)、Non JET-ALT 配置時数の拡大**
2014年度はJET-ALTを100人配置、2015年度はさらに200人に拡大し、全都立高校及び都立中等教育学校に配置。
- ・ **少人数指導の充実**
「東京方式少人数・習熟度別指導ガイドライン《中学校英語》」を策定、授業改善を図るため、都内公立中学校に教員を加配。
- ・ **東京都独自の英語教材「Welcome to Tokyo」の活用**
Elementary (初級編)、Basic (基礎編)、Intermediate (発展編)のそれぞれを都内公立学校の小学5・6年生、中学生、高校生に付属DVDとともに配布。
- ・ **東京グローバル10、及び英語教育推進校の指定**
2015年度に「東京グローバル10」10校、2016年度に「英語教育推進校」40校を指定。外部検定試験による生徒の英語力調査やオンライン英会話を実施。
- ・ **ICTのさらなる活用**
「東京グローバル10」「英語教育推進校」に音声リーディング・ソフト及びオンライン英会話学習、教員の研修にもオンライン英会話を導入。
- ・ **小学校における教科化への対応**
2016年度から2年間、10地域を「英語教育推進地域」に指定。「英語教育推進地域」を含めた25地区に38人の「英語教育推進リーダー」を配置。
- ・ **英語力向上研修の新設、指導力向上研修の拡充**
ALTとの効果的なチーム・ティーチング指導法やTESOLなどの指導方法を学ぶ研修の開始。
- ・ **英語科教員等の海外派遣研修の充実**
2014年度から中・高の教員140人を約3か月、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドに派遣。2016年度からカナダを加え、小学校教員も派遣。
- ・ **教員の検定試験資格取得に向けた研修の実施・受験支援**
2016年度から小中高教員を対象とし、検定試験に向けた講座を開設・検定料助成、小学校の教員を対象に中高英語免許取得助成。

* 東京都教育委員会の資料を基に編集部で作成

*1 Teaching English to Speakers of Other Languagesの略。英語を母国語としない人に指導するために、第二言語習得理論、語彙・文法・発音などの教授法、カリキュラム、指導案、評価法などを学ぶ。 *2 JET-ALTは、語学指導等を行う外国青年招致事業で雇用したALTのこと。Non JET-ALTは、自治体などが独自に雇用したALTのこと。



東京都教育庁指導部
国際教育推進担当課長
瀧沢佳宏
たきざわ よしひろ
東京都立向国高校副校長、東京
都教育庁指導部 人事課 都立
学校教育部等を経て、現職。

ネイティブ・スピーカーと 意欲的に話す生徒たち

格試験取得講座を充実させている。小学校については、英語の教科化に向けて支援する。海外派遣研修は、16年度から小学校教員も対象とした。また、10地域を「英語教育推進地域」に指定し、この10地域を含む25地区の38人を「英語教育推進リーダー」に指定し、該当地区には教員の加配をした。一方、中学校については、英語の少人数指導を充実するために「東京方式少人数・習熟度別指導ガイドライン」を作成。パフォーマンステストの方法の資料を作成・配布し、各校での実施を支援している。

都教委は、15年度からJ・E・T・A・Lの配置を全都立高校、中等教育学校に拡大し、ネイティブ・スピーカーの活用による授業改善に取り組んできた。同時に、「使える英語力」のさらなる伸長には、英語の学習時間の

絶対量を増やすことも必要であり、そのためには生徒自身が英語を学び続ける意欲を持てるようにすることが重要だと、瀧沢課長は強調する。

「週3〜4時間の授業に加え、自律的な学習が必要です。主体性を持った学習意欲の育成は、高校段階での英語教育において英語力そのものを身につけると同じくらい重要です」そのための事業として、16年度、「東京グローバル10」全10校と「英語教育推進校」のうち12校で、ベネッセの「オンライン英会話」(*3)を始めた。これは、生徒一人ひとりがタブレット端末を使い、インターネット電話サービス「Skype」を利用して教室と海外在住のネイティブ・スピーカーの講師とをつなぎ、1対1で英会話の授業を行うというもの。授業中に30分間、月3回、主に2年生で実施している。

「実施校の教員からは『生徒が意欲的に講師と話していた』などの声を聞いています。日常生活で、ネイティブ・スピーカーと1対1で話す機会はそうありません。オンライン英会話が生徒の英語コミュニケーションの意識を転換させ、英語学習への姿

勢を変える突破口になるのではないかと期待しています」(瀧沢課長)

16年度には、「東京グローバル10」と「英語教育推進校」の全校に、英語4技能を測る外部検定試験の受験費用を都教委が負担する事業も始めた。「指導と評価の一体化は、指導改善の継続とともに、生徒の学習意欲向上にも重要です。生徒が全国的な検定試験で客観的に英語力を把握し、達成感や課題意識を持つことで、授業外の学習時間増加につながることを期待しています」(瀧沢課長)

外部検定試験を活用することにした理由は、スピーキングの評価が学校だけでは難しいからだ。各団体が実施する外部検定試験の中から、各校が自校に合うものを選ぶという方法を採用しており、ベネッセの「GET for STUDENTS」も多くの高校で利用されている。

徐々に見えてきた 授業改革の好循環

今年、海外派遣研修を視察した瀧沢課長は、教員の変化を感じた。研修の一環で、受講者は現地校で授業補助に入るが、その際、日本から持

参したギターを弾いたり、他国からの留学生たちと一緒に踊ったりと、積極的に交流する姿が見られたのだ。

「以前に比べて活動的な授業が増えており、そのような授業を受けた生徒が教員になり、自分なりに研鑽、工夫を重ねて子どもに教えるというよい循環が回り始めているのではないでしょうか。このサイクルによって、授業が活動的になるのではないかと心強く感じています」(瀧沢課長)

16年度は、ほかにも、都独自英語教材『Welcome to Tokyo』の冊子とDVDを作成し、都内公立小学5年生以上の全児童・生徒に配布するなど、グローバル人材の育成に向けた様々な事業を展開。さらに、「国際教育・東京ポータルサイト」(*4)を立ち上げ、情報発信にも努めている。「20年度には学習指導要領の改訂があり、オリンピック・パラリンピックを迎えます。社会全体もそうですが、何より東京都は知事や教育長を始め、グローバル人材育成に強く前向きです。このタイミングを逃したら、いつやるのかというNow or Neverの意識で、英語教育改革にまい進したいと思います」(瀧沢課長)

*3 ベネッセの「Online Speaking Training」のこと。基本は Skype を活用したオンラインでのマンツーマンのプログラムで、主に中学・高校生を対象に、学習指導要領に沿って開発された教材でレッスンを行う。CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) に基づき、レベルに応じて約 120 のコンテンツを用意。 *4 <http://tokyo-portal-edu.com>

2017年4月、滋賀大学に新設予定！

日本初のデータサイエンス学部が 高校生対象のプレオープンイベントを開催

「宝の山」とも言われているビッグデータ。それを解析し、新たな価値を創造するための知識と技能を学ぶ「データサイエンス学部」が日本の大学としては初めて、滋賀大学に2017年4月に新設される。それに先立ち、高校生対象のプレオープンイベントが、今年10月に行われた。データサイエンスとは何かをイメージしやすいよう、少人数のグループワークやパソコンを使った演習などが行われ、約100人の高校生が参加した。

ビッグデータ解析に必要な 知識と技能を身につける

2017年4月、日本の大学としては初となる「データサイエンス学部」が滋賀大学に設置される。同学部は、社会に溢れているデータを分析し、新たな価値を創造することのできる人材の育成を目指す学部だ。

従来のデータ分析は、経済学や心理学などの領域ごとに行われていた。目的を持ってデータを収集し、統計学などの手法を用いて分析することが主だったと言える。ところが、ICTの発達により、多種多様かつ膨

大な量のデータが、生成・収集・蓄積されるようになった。例えば、カーナビゲーションを通じて得られる自動車

の走行履歴や、ネット通販での個人の購入履歴など、データ分析を目的とせずに蓄積されているデータだ。それらは「ビッグデータ」と呼ばれ、単独で、または、ほかのデータと組み合わせることで、新たな商品を開発したり、異変を察知して危険回避することに生かされたりするようになった(図1)。ビッグデータは、政治、経済、交通、医療、教育、防災など、あらゆる分野で新たな価値を生み出す「宝の山」として、近年重要視されている。

位田隆一^{いだ}学長は、学部新設の背景を次のように説明する。

「今や『ビッグデータ時代』とも言われ、ビッグデータは私たちの日常生活とも深くかわるようになっていきます。しかし、社会的ニーズが高いいにもかかわらず、日本の大学にはビッグデータを解析できる人材を専門に育成する学部や学科がありません。アメリカやイギリス、中国、韓国などでは、データサイエンスの育成が進んでおり、日本は世界から遅れを取りつつあります。計量経済学が専門の佐和隆光前学長は、そうした状況に危機感を抱き、本学がデータサイエンスの教育に先鞭を

滋賀大学 学長
位田隆一 いだ・りゅういち



京都大学大学院法学研究科博士課程中途退学。フランスパリ第2大学高等研究課程(DEA)修了。京都大学大学院法学研究科教授などを経て、現職。

滋賀大学
データサイエンス教育研究センター長
データサイエンス学部長(就任予定)
竹村彰通 たけむら・あきみち



東京大学大学院経済学研究科修士課程修了。スタンフォード大学統計学部Ph.D.修了。スタンフォード大学統計学部客員助教授、東京大学経済学部教授などを経て、現職。

図 1

ビッグデータの活用事例

ビッグデータ解析

マーケティング(POSデータ分析など)、SNS分析(Twitterなど)

インターネットの通販サイトを見ていると、「あなたにおすすめ」と商品が紹介されることがある。それは、そのサイトを利用する度に記録される、閲覧・購買履歴や購買者の特徴などの情報を分析して、サイトを見ている人が好みそうな商品を選んで紹介する仕組みになっているからだ。

新薬の開発

新たな治療法の開発、予防医療の活用

電子カルテが普及し、国民一人ひとりの受診データや健康診断データが、容易に蓄積できるようになった。そのビッグデータを解析することで、個人に合わせた医療や薬の処方パターンを提案できるようになると期待されている。

ビジネス

健康

ビッグデータの活用事例

人工知能を使った様々な応用

交通支援システム、防災支援ツール作成など

気象庁や気象予報会社が集積している観測データと、高性能シミュレーションによる分析結果を集約したビッグデータを解析することで、積乱雲の動きを瞬時につかむことができるようになった。それにより、ゲリラ豪雨のよりの確かな予想が可能となった。

* 同大学の資料を基に編集部で作成

環境

教育

スマートフォンアプリの作成

個人に合った学習法の提案など

タブレット端末を使う学習や、成績などのデータ管理によって、日々の学習内容やテスト結果のデータを分析すれば、教師、保護者、子どもの3者が、子どもに合った学習方法や学習時間を理解でき、成績向上も期待できる。

文理融合型カリキュラムで価値創造のための力を育む

ビッグデータの解析には、大規模

つけることにしたのです」

データを分析・解析するための専門的知識とスキルである「データアナリシス(統計学)」と、大規模データを加工・研磨・処理するための専門的知識とスキルである「データエンジニアリング(情報学・コンピュー

タ科学)」が必要となる。さらに、データが持つ意味を捉えるためには、そのデータに関する分野の知識も求められる。データサイエンス学部のカリキュラムは、統計学、情報学に関する科目のほかに、経済や経営などの科目も編成されている。

データサイエンス学部長に就任予定の竹村彰通教授は、学部での学びについて次のように説明する。

「データがどのような意味を持つのか、データの背景を十分知らなければ、新たな価値を見いだすことは難しいでしょう。そこで、データの応用先である経済や政治、医療、教育などの専門知識も学べるカリキュラムにしました。本学部は、理系的な分野と人文社会的な分野の両方を学ぶ、文理融合型の学部と言えます」

学部新設に先駆けて、16年4月には「データサイエンス教育研究センター」を開設し、全国から統計学と情報学のスペシャリストを招聘し、計13人が専任教員に着任した。ほかに、京都大学や名古屋大学、総務省統計局などと連携し、多様な専門分野の教員による授業を提供する予定だ。

企業・自治体から提供されるデータで実践的な演習を積む

1～4年次を通して、実際のデータを扱ったPBL(※)を行うのも、同学部の特徴の1つだ。1・2年次は既に解析済みのデータを題材として演習を積むが、3・4年次では企業や自治体から提供されるデータを解析して、問題解決を図り、新たな価値創造に結びつけていく共同プロジェクトを行う予定だ。

「地域からデータを提供していただき、それを解析することで、地方創生にも貢献できるのではないかと考えています。3・4年次では、連携先の企業・自治体でインターンシップを行うことも検討中です」(竹村教授)

京都銀行や滋賀銀行とは包括的連携協定を締結し、ほかにも、地元の企業や自治体と連携協定の準備を進めている。

どのような職種に就いても求められるデータ分析の能力

卒業後の進路としては、情報通信

* Project-Based Learning、もしくは Problem Based Learning の略。プロジェクトベースの課題解決型学習のこと。

や情報技術開発、金融機関、製造業、製薬会社での情報解析部門などが想定されている。位田学長は、同学部への企業からの期待を強く感じている。

「企業に話をうかがうと、今や多くの企業にデータ分析を専門とする部門があるということです。ただ、その担当者は、必ずしも統計学や情報学などを専門に学んできたわけではないようです。データサイエンスを専門とする人材は不足しており、その育成への期待は非常に大きいと感じています。学部卒業生がさらに専門性を深めるとともに、データ分析を担当する社会人がスキルアップできる場として、できるだけ早い時期に大学院を設置したいと考えています」

竹村教授は、データサイエンスの将来性について次のように語る。

「今や、どのような企業や職種に就いたとしても、問題を分析し、解決策を提案する力が求められます。それは、本学部で身につけることのできるデータ分析に基づく課題発見力や、複数のデータを組み合わせる新たな知見を引き出す力などと重なります。データ分析に強い人材は、様々な業種で必要とされているのです」

プレオープンイベント・レポート

データサイエンスが何かを体験できる模擬演習を実施

学びの内容をイメージしやすくするため身近な活用場面を紹介

データサイエンス学部では今年10月、高校生を対象としたプレオープンイベントを、学部のキャンパスとなる彦根キャンパスで開いた。高校生1～3年生の各学年20～40人の申し込みがあり、そのうち滋賀県外から約30人が参加した。保護者の関心も高く、親子での参加者も目立った。

イベントでは、学部・入試説明会のほかに、高校生がデータサイエンスという学問をイメージしやすいよう、模擬講義と模擬演習が行われた。模擬講義は2つ行われた。1つめのテーマは、「ゼロから始めるデータ分析」だ（写真1）。データサイエンスの活用例として、選挙の出口調査のデータによって当選確実の速報が

出されることや、活断層の活動状況のデータを基に大地震の発生予測が行われていることなどを紹介し、データサイエンスが身近なものであることを伝えた。そして、ニュースで紹介されたグラフやデータを提示し、おかしい箇所を考えさせる問題を5問出題した。講師が会場に答えを尋ねると、どの問題も数人の高校生が挙手をし、しっかり理由も添えて答えを発表していた。

もう1つのテーマは「シミュレーションと最適化手法」だ。何が起るのかを予測するシミュレーションと、よりよい性質を持つように設計する最適化の手法それぞれにおいて、どのような技術が使われているのかを解説した。課題研究や探究学習で活用できるような内容であり、文部科学省指定のスーパーサイエンスハイスクールなどに通う高校生にとつ

模擬講義「ゼロから始めるデータ分析」



写真1 データのおかしい箇所を考えさせる問題では、講師の問いかけに高校生が挙手をして答えた。大勢の人がいる場でも、堂々と発表する姿に、大学側は「高校生に頼もしさを感じた」と話す。

ては関心の高い講義だったようだ。

グループワークで問題解決のプロセスを体験

模擬演習も2つ行われた。1つめのテーマは、「お茶の間にやってきたデータサイエンス」だ。高校生4人で1グループとなり、ファシリテーター役の大学院生が1グループに1人ついて、問題解決のプロセスを体験するためのグループワークが行われた。課題は「家庭でのエネルギー

模擬演習「お茶の間にやってきたデータサイエンス」

消費量を減らすためには」だ。まず、家庭で消費されるエネルギーには何があるのか、エネルギー消費量が増える要因は何かなど、グループ内で意見を出し合った。1グループに1台のタブレット端末が用意され、インターネットで情報を収集しながら、意見を付せん紙に書いていった(写真2)。似たような内容をグループピングしながら意見を整理し、模造紙に提案をまとめ(写真3)、各グループの代表者が発表した。

2つめのテーマは「表計算ソフトを使ったデータ整理」だ。1人に1台のパソコンが用意され、表計算ソフトを使ってデータ処理の演習を行った。手際よく入力していく高校生がいる一方、キーボードの操作に慣れていない高校生もいた。いずれの模擬演習も、入学後の授業内容・授業形態を想定したものであり、高校生は大学での学びを具体的にイメージできたに違いない。

参加者個別の相談会では、入試の



上/写真2 「家庭でのエネルギー消費量を減らすためには」の解決方法を、Problem(問題)、Plan(調査の計画)、Data(データ)、Analysis(分析)、Conclusion(結論)の観点で話合った。メンバーの多くは初対面であったが、お互い遠慮し合う様子はあまりなく、自分の意見をしっかり説明していた。
右/写真3 最後に模造紙に意見をまとめ、代表者が全体に発表した。

—プレオープンイベントに参加して—

滋賀県立膳所高校2年 小松美幸さん

情報学の分野を志望しているので、今日参加しました。先生方の話から、データサイエンスの応用範囲が広いと分かり、また、あらゆる分野でデータ化が進むからこそデータを専門に扱う人材が必要とされていることを知り、さらに関心が高まりました。

滋賀県立虎姫高校2年 饗庭拓真さん

情報学や統計学は、今後、社会からの需要がある学問だと知り、将来、必要となる知識だと感じました。私はパソコンを操作することが好きなので、表計算ソフトを使った実習は楽しく取り組みました。

滋賀県立彦根東高校1年 奥井美奈さん

2年生になると、スーパーサイエンスハイスクールの活動で、本格的な課題研究が始まります。今日、様々なデータ分析の手法があることを学べたので、来年行う調査データの分析では、今日の学びを役立てたいと思います。

滋賀県立彦根東高校2年 吉田尚史さん

今日参加した模擬演習のような内容は高校でも行っていますが、問題提起から解決の提案まで一気に行ったのは初めてで、凝縮して取り組む楽しさがありました。他校生とのグループワークを通じて、コミュニケーション能力の大切さを改めて感じました。

方法や下宿先、卒業後の進路などについて具体的に質問する高校生の姿が見られた。同学部への関心の高さに、大学側も手応えを感じたようだ。竹村教授は、数学だけでなく、社会に関心のある高校生にこそ、データサイエンスを学んでほしいと語る。「データサイエンスでは、数学の知識や技能を使いますが、扱う題材は社会にかかわりの深い事柄です。高校までの数学の問題のように答えは1つではなく、社会的な文脈で考え

て、最適の解が何なのかを判断しなければなりません。数学が得意かどうかよりも、社会の問題を考えたい、解決したい、新たな価値を生み出したいという意欲の方が、本学部で学ぶためには重要です。そういった意欲のある高校生に本学部で学んでほしいと思います」

データサイエンスの技術や考え方は、高校の探究学習でも役立つものであり、同学部は今後、県内2つの高校と高大連携協定を締結する予定です。

COVER STORY

教師と生徒の肖像

厳しく、温かく

表紙の学校 石川県立小松明峰高校 喜多雅美先生

生徒曰く、3学年主任の喜多雅美先生は「厳しく、熱く、真っすぐな先生」だ。担当教科の英語では、放課後、1対1の添削指導を行う。英作文や英文和訳の指導に加え、最も大切にしているのが、生徒が読んだ英文をどう感じたのかを深く掘り下げることだ。「『どうして、なぜ、どこが』と厳しく問われるので、深く読み取って考えなければならないので大変」と生徒は言うが、それこそが先生のねらいだ。課題の英文は自分の生き方や将来について考えさせられるような内容を選び、指導は1対1にこだわる。生徒自身が集中して考え、自らの言葉で説明しなければ前に進まない状況にする。「英語も、日本語と同じコミュニケーションの手段です。相手が何を言おうとしているのか、表面的な解釈ではなく、ハートで感じる事が大切だということを、生徒に感じてほしいのです」と語る。

担任を持つクラスでも、喜多先生は「家庭学習時間はこれで十分だと思うのか」「本気を出しているのか」と厳しい言葉を投げかける。「若い頃は、生徒につらい思いをさせてまで大学合格を目指させる指導でよいのかと自問していました。でも、大勢の教え子たちが、社会人として親として、強くたくましく生きている姿を目にし、入試の壁を乗り越える経験はその後の人生の大きな力になることを教わりました」。そうした先生の思いを、生徒も受け止める。「先生は、下校時刻ぎりぎりまで添削指導をしてくれますし、面談では模試の結果を細かく見て、どうすればよいかを一緒に考えてくれます。今は思うような結果が出ていないけれど、最後まで頑張ります」と決意を示す。

卒業式まであと数か月。生徒たちが、誇らしげな顔で声高らかに校歌を歌い、やるだけのことはやった、この学校で学んでよかったと思えるように。その日を目指して、今日も真っすぐに生徒に向き合う。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume5 2016年12月号

2016年12月12日発行/通巻第361号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2016

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17